

「大牧者なる主と共に」

長崎めぐみ教会 後藤 健一



に住まいます。

「主」は私の羊飼い。…まことに 私のいのちの日の限り／いつくしみと恵みが私を追って来るでしょう。私はいつまでも「主」の家
詩篇23・1、6

主の聖名を崇めて賛美と感謝を捧げます。

牧師先生方はじめ教会学校の先生方、ご奉仕者の方々の常日頃の地道な教会学校の尊いお取り組みを、主にあつて感謝申し上げます。私も教会の教会学校教育や「牧羊者」の恩恵に与らせて頂き、主にあつて感謝する者です。

さて『アイゼナツハの老校長トレボニウスは、生徒に出会つと、どこであつても自分から先に丁寧にお辞儀をしたといふことです。…彼は…「未来の偉大な、国を背負つて立つ人物が、この中にいるのです」と言つたといひます。はたして、その生徒の中から後年のマルティンルターが生まれたのです。』（金井由信原著、金井望編著『実を結ぶ教会学校（改訂版）』（ヘララ出版、66頁）。私は

この教会付属学校の校長先生が生徒達に敬意と希望をもって教育する姿勢に教えられます。またJ・ウエスレーの母スザンナ・ウエスレーの家庭でのキリスト教信仰教育も思い出されます。主との交わり、及び教会や家庭等での主にある聖徒の交わりの中で次世代の聖徒が主にあつて育てられてきた事を思います。

コロナや戦争とその影響、災害、インターネット等にあふれる玉石混交の情報、価値観の多様化の加速等の混乱の時代。ですが、それら全てをお見通しの上で語られている、時空を超越した絶対主権者で、全知全能の主なる神の永遠不変の揺るがない神のみ言葉に心新たに堅く立ち、主に祈り、より頼み従いつつ、聖徒を聖徒たらしめる主のみ言葉を宣べ伝え続けたいと思います。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。」(エペソテ3:2)。宣教しつつも、ふと将来の後継者の事が心配になる事もあります。が、そんな時、大牧者なる主イエスを仰がされ平安と希望を得ます。主は人生のあらゆる季節において大牧者であり、過去、現在そして未来の全キリスト教会の全世代の大牧者です。この主に信頼して、主のみ言葉の宣教を私も何とか地道に励みたく願います。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「新約聖書丸ごと早わかり(3)」	4
神 ▲ 7 / 2 ～ 7 / 16 ▼	17
ノア・族長 ▲ 7 / 23 ～ 8 / 20 ▼	35
キリストのみわざ ▲ 8 / 27 ～ 9 / 10 ▼	65
イスラエルの指導者 ▲ 9 / 17 ～ 9 / 24 ▼	83
牧羊ひろば(郡山キリスト共同教会)	95
「牧羊者」のご購読・ご利用について	100
おわりに	100

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシヤ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
 こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」(以上、日本キリスト教
 団出版局)、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」(日本ホーリネス教団出
 版局)、イン：「教会学校さんびか」(インマヌエル教会学校部)、ふ：「ふくいん子
 どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」(以
 上、日本児童福音伝道協会)、PW：「ブレイズワールド」(リビングブレイズ)

神を信じる生涯

イザヤ 40 : 26

● 神

行事 テーマ 聖書 暗唱聖句

7月2日 創造者なる神 イザヤ40・21〜26 同26節

9日 聖なる神 イザヤ6・1〜7 同3節

16日 愛なる神 Iヨハネ4・7〜11 同8節

● ノア・族長

7月23日 ノアの箱舟 創世記7・1〜24 同1節

30日 アブラハムの旅立ち 創世記12・1〜9 同1節

● キリストのみわざ

8月6日 イサクの井戸 創世記26・12〜22 5・5
マタイ

13日 天からのほしご 創世記28・10〜22 同16節

20日 すべてを良きに変える神 創世記50・15〜21 同20節

8月27日 罪の赦しの恵み マタイ9・1〜8 同2節

9月3日 ラーデー 5つのパンと2匹の魚 マタイ14・13〜21 同20節

10日 嵐を鎮めたイエス マタイ14・22〜33 同27節

● イスラエルの指導者

9月17日 モーセの誕生 出エジプト2・1〜10 ヘブル11・23節

24日 ヨシユアとエリコ 1の町 ヨシユア6・1〜20b 同5節

新約聖書丸ごと早わかり (3)

工藤 弘雄



ヘブル人への手紙を理解する

1 執筆者、執筆の時と事情

65年から69年頃。執筆者は不明。ヘブル人、すなわちユダヤ人のクリスチャンに宛てて信仰が逆戻り（バックスライド）しないように励まし、信仰にとどまらせることを目的に書かれました。

2 ヘブル書の特徴

- ①ヘブル書の中心は、天上におけるイエス・キリスト。第5の福音書とも言われています。
- ②ユダヤ教に比べようもないキリスト教の「はるかにすぐれた」卓越性（はるかに優れていること）、優位性（優れた立場）が示されています。
- ③大祭司のキリストのみ姿は、現在のキリストのみ姿。

④キリストの贖罪の効力が明確に語られています。

⑤旧約聖書における信仰の勇者の列伝も圧巻。

⑥特徴的な言葉。「永遠」、「完全」、「一度」、「血」、「…なしに」、「さらに良い」、「私たちは…を持つている。それゆえ…しようではないか」、「座し」、「天」などです。

⑦いくつかの警告の言葉も特徴です。

3 ヘブル書のメッセージ

神の子キリストの卓越、優位性

- ①預言者よりもはるかに優れるお方。
- ②天使よりもはるかに優れるお方。
- ③モーセよりもはるかに優れるお方。
- ④ヨシユアよりもはるかに優れるお方。
- ⑤アロンよりもはるかに優れるお方。
- ⑥旧い契約にはるかに優る新契約の仲保者。

⑦古い幕屋、神殿にはるかに優る新しい幕屋。

⑧古い犠牲にはるかに優る唯一、完全、永遠の犠牲。

⑨神の子キリストの三大顕現。過去、罪を取り除くために現れ（9・26）、現在、御父の右に現れ（9・24）、将来、栄光の中に現れる（9・28）。

⑩信仰の勇者に励まされ、信仰の創造者、完成者であられるイエスを仰ぎつつ走ろう。

4 梗概

教理的部分 1・1～10・18

①キリストの人格の卓越性（1・1～4・16）

②キリストの祭司職の卓越性（4・14～7・28）

③キリストの贖罪の卓越性（8・1～10・18）

実行的部分（10・19～13・25）

①大いなる救いによる生涯（10・19～39）

②信仰による歩み（11・1～12・29）

③愛と善行の勧め（13・1～19）

④終わりのあいさつと祝祷（13・20～25）

公同書簡とは

ヤコブ、Iペテロ、IIペテロ、Iヨハネ、IIヨハネ、IIIヨハネ、そしてユダの手紙は、公同書簡と呼ばれています。それ

は、これらの手紙が、特定の教会や、一地区の諸教会にあてた手紙ではなく、もっと広い範囲の教会への手紙だからです。

ヤコブの手紙を理解する

1 執筆者、執筆の時と事情

本書の執筆者は、「主の兄弟ヤコブ」。エルサレム教会の重要な指導者。かなり早い時期にエルサレムから国外に散っていたユダヤ人クリスチャンにあてて書かれました。試練にあつてゐる者を励まし、信仰があれば行いがなくてもよいという者を戒め、この世の欲望に引きずられる者たちに厳しい警告を与えるのが目的です。

2 この手紙の特色

①すべての手紙の中でも最も実際的です。

②象徴的比喩で満ちています。文体も劇的です。

③ヤコブの手紙とパウロの手紙は対立するようには見えませんが、実は一つです。ヤコブも行為を強調しましたが、生きた信仰には必ず忍耐や神への服従が伴うことを強調したのです。

3 ヤコブ書のメッセージ

①試練をも歓喜とせよ。信仰＋試練＝信仰×験し＝信仰ーか

す。忍耐（小島伊助師）。

②内在の我欲からきよめられるように。

③み言葉は生きて働く完全な自由の律法。

④栄光の主が見えてれば、人を分け隔てできない。

⑤悪魔さえも唯一の神の存在を信じる。しかし、神への愛、神に対する服従はない。真の信仰は行いを生み出す。神の友アブラハムを見よ。

⑥舌を制する人こそ完全な人。

⑦聖き人とは上よりの知恵に満ちた人。

⑧世と悪魔と肉は悪の三位一体。知れ、神はねたむほどに私たちを愛される。

⑨神に従え。神に近づけ。主の前にへりくだれ。

⑩全ての行動が神のみこころの中にあるように。

⑪ヨブの忍耐を学べ。ヨブは主の結末を見ていた。

⑫現在の教会の姿（5章13節以下）

教会の中にいる人々 (a) 苦しむ者 (b) 喜ぶ者 (c) 病める者

(d) 正しい者 (e) 迷う人 (f) 罪に陥る者 (g) 引き戻す者

教会にあるもの (a) 祈り (b) 讚美 (c) 癒し (d) 罪の赦し

(e) 愛の交わり (f) 祈りの答え (g) 救霊

祈りのすばらしさ (a) 自分のための祈り (b) とりなしの祈

り (c) 信仰の祈り (d) 協力の祈り (e) 義しい人の祈り (f) 切なる祈り (g) さらなる祈り

4 梗概

あいさつ (1・1)

信仰と試練 (1・2～18)

信仰とみ言葉 (1・19～27)

信仰と兄弟愛 (2・1～13)

信仰と行い (2・14～26)

信仰と舌の制御 (3・1～12)

信仰と真の知恵 (3・13～18)

神中心の信仰生活 (4・1～17)

①愛される神 (5) ②与えられる神 (6) ③近づかれる神

(8、10) ④さばかれる神 (12) ⑤すべ治められる神 (15)

富んでいる人への警戒 (5・1～6)

忍耐と慰め (5・7～12)

祈りについての教え (5・13～18)

迷い出た者を連れ戻せ (5・19、20)

ペテロの手紙 第一を理解する

1 この手紙を書いたペテロ

福音書におけるペテロと使徒の働きや手紙に見られるペテロとは大きな相違があります。ペンテコステ以後、聖霊に満たされた彼は、忍耐強く、愛に満ち、勇気ある神の人に変えられています。

2 執筆の時代と場所

この手紙は皇帝ネロの迫害が激しさを増した63年頃、「パピロン」(5・13)で書かれ、同労者のシルワノに委託しました。

3 執筆の事情

本書簡は「散つて寄留している選ばれた人たち」(1・1)、異邦人社会の中に「散らされた旅人」である信者に宛て書かれました。今、聖霊は世にあつて試みられ、戦っている全信者に語りかけています。

4 この手紙の特色

① 苦難の中にあるクリスチャンを励ます手紙。
② キリスト者の苦難と栄光！「苦難」は14回、「喜び」「栄光」は26回も強調。

③ 7つの尊いこと。尊い試練(1・7)、尊い血(1・19)、尊

い生ける石(2・4、6)、尊いキリスト(2・7)、尊い霊(3・4)、尊い信仰(Ⅱペテロ1・1)、尊い約束(Ⅱペテロ1・4)

④ ヨハネが「愛の使徒」、パウロが「信仰の使徒」であれば、ペテロこそ「希望の使徒」でした。

5 梗概

あいさつ(1・1、2)
救いの恵み(1・3～12)

神に対してもつべきキリスト者の態度(1・13～2・10)

この世におけるキリスト者(2・11～3・12)

苦難と戦うキリスト者(3・13～4・19)

教会に対する勧め(5・1～11)

終わりのあいさつ(5・12～14)

ペテロの手紙 第二を理解する

1 執筆の時と事情

ペテロの殉教より少し前の66年頃。ローマの大火災もあり、皇帝ネロの迫害も厳しさを増している頃、ローマで書かれたと思われます。当時、偽教師による異端があらわれ、不道徳をもつて教会内をかき乱そうとしていました。これに対

して信者に警告し、その徳を高めるために書かれました。

2 この手紙の特色

①第一書は慰めの手紙、第二書は警告の手紙。

②外部からの激しい迫害の中での励まし、教会の内部にある危険に関して警告。

③内側からの危険に対して勝利の秘訣は、「恵みと知識」によつて強くなること。小島伊助師は第一書講解に「聖選の宿人」、本書講解に「主を知る知識に進め」とタイトルをつけています。主の恵みに徹し、ますます主との交わりが深められるとき、異端やあざけりに勝利できます。偽ものに勝つ秘訣は、本物をとことん知ることです。

3 梗概

あいさつ (1・1)

主を知る知識とキリスト者の成長 (1・2～21)

私たちの広大な貯蔵 (1・2～4)

私たちの実際的な進歩 (1・5～11)

私たちの不動の確信 (1・12～21)

主を知る知識とキリスト者の危険 (2・1～22)

偽教師・その教え (2・1～3)

偽教師・その滅亡 (2・4～8)

偽教師・その行い (2・9～22)

主を知る知識とキリスト者の希望 (3・1～18)

再臨の真理あざけられる (3・1～4)

再臨の真理確認される (3・5～10)

再臨の真理適用される (3・11～18)

ヨハネの手紙 第一を理解する

1 執筆の時代と場所、その事情

ヨハネは本書簡を、紀元90年頃、エペソで書いたと思われます。新約聖書の聖文書では最後期のものの一つで、福音書よりも後に、黙示録よりも前に書かれたと思われる。

本書簡は多分、エペソを中心に黙示録のように小アジアの諸教会にあてて書かれたと推測されます。当時、小アジアの諸教会には異端の教えが入って来る危険がありました。彼らはイエスがキリストであることを否定し、また、イエスが神の子であることを認めようとしませんでした。さらに、彼らは、キリストが肉体をとつてこの世に来たことを否定しました。聖書は、キリストは全く神であられ、全く人であられたと記します。全き神が、罪をほかにして私たちと全く同じ人間になられました。この手紙の冒頭では、キリストは五感で認識でき

るお方として、この地上に來られたことを記しています。正しい福音の教理は正しい生活に導き、誤った異端的教えは誤った生活に導きます。彼らは道徳的にも誤った生活をしていました。この異端に警戒するようにこの手紙は書かれました。

2 この手紙の特色

ヨハネの福音書の執筆の大きな目的は、「イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため」(ヨハネ20・31)でした。

この手紙は「神の御子の名を信じている」者に「永遠のいのちを持つていることを分らせるため」(5・13)に書かれました。ですから、福音書の鍵の言葉は「信じる」こと、書簡のそれは「知る」こととなります。キリストを信じ、人格的に知る。そこに成長があります。「知る」は本書簡で30回以上も用いられています(たとえば2・3、5、29、3・14、16、19、24、4・13、16、5・15、18〜20)。

この手紙の最大の特色は、「愛の書簡」。福音書は信仰、黙示録は希望、本書は愛に関しての手紙です。老使徒ヨハネは厳しい言葉をもって異端を攻撃すると共に、懇切に愛を説いています。

小島伊助先生は、本書に三つのLがあると仰いました。

Light(光)とLife(命)とLove(愛)です。ジョン・ウエスレーはこの手紙を愛読し、「キリスト者の完全」とは「愛における完全」であり、キリスト者の聖化とは「罪を排除する愛」(Love Excluding Sin)と言いました。

3 ヨハネの手紙 第二のメッセージ

神との歩みにおける7つのステップ(階段)

第1ステップ・光の中を歩む(1・7)。

第2ステップ・罪を認め、告白し、御子の血にきよめられる(1・7〜9)。

第3ステップ・神のみこころに従う(2・4)。

第4ステップ・キリストに倣う(2・6)。

第5ステップ・他人を愛する(2・9〜3・16)。

第6ステップ・世を退ける(2・16)。

第7ステップ・罪に勝ち、義を行う(3・1〜10)。

4 梗概

序言(1・1〜4)

神との交わり(1・5〜2・2)

神を知る生活(2・3〜29)

神の子供としての生活(3・1〜4・21)

信仰による勝利(5・1〜21)

ヨハネの手紙 第二を理解する

1 執筆の時代と場所

年代、場所については第一の手紙と同じと言えるでしょう。

2 あて先

聖書中、女性にあてた唯一の手紙。「長老から、選ばれた婦人とその子どもたちへ。私はあなたがたを本当に愛しています」(1)。教会はギリシャ語で女性名詞、キリストの花嫁にたとえられているので、「婦人」は教会をさしていると解釈する人もいます。

3 梗概

あいさつ (1~3)

互いに愛し合うこと (4~6)

反キリスト者を警戒すること (7~11)

終わりのあいさつ (12, 13)

4 ヨハネの手紙 第二のメッセージ

「真理」という言葉がわずか13節中5回も見いだされます。

ヨハネが語っている真理は、上からの真理、キリスト・イエスにある真理。単に真理を賞賛するだけでなく、真理によって歩む。そうすれば、互いに愛し合うことができます。真理の

中を歩む愛の生活がこの手紙のメッセージです。

ヨハネの手紙 第三を理解する

1 執筆時代と場所

年代、場所については第一の手紙と同じと言えるでしょう。

2 執筆事情

ガイオの所属していた教会にディオテレベスという人物がおり、使徒たちをのしり、服従せず、勝手に振る舞っていました(9, 10)。ヨハネは、ガイオがディオテレベスに従わないように注意し、旅先にある巡回伝道者の世話をすることを奨励するために、この手紙を書き、たぶんデメテリオによって、ガイオに届けられたと思われる。

3 あて先

執筆事情で見たように、「ガイオ」(1)という人物にあてて書かれています。ガイオという名前は、当時かなり一般的な名前であったように思われます(使徒19・29、ローマ16・23、Iコリント1・14)。おそらく、エペソ周辺の長老か教会員であったでしょう。彼は旅先にある巡回伝道者をもてなし、ヨハネから称賛されています(5)。巡回伝道者についての言及は、1世紀末の教会事情を知る上で興味深いものがあります。

4 ヨハネの手紙 第三のメッセージ

教会の中でガイオとディオテレペスとデメテリオ。ガイオは真理の中を歩み、巡回伝道者をもてなす。ディオテレペスは野望と自己中心で使徒たちをのしる。デメテリオは証明済みのクリスチャン。私たちはガイオとデメテリオにならまいしょう。真理の中を歩んでいる者を「見る」から、「聞く」。小島先生は、失明後、この老ヨハネの記述に共鳴されていたことを思い出します。

5 梗概

あいさつと祈り（1〜2）

ガイオに対する称賛（3〜8）

ディオテレペスに対する非難（9〜11）

デメテリオの紹介（12）

終わりのあいさつと祝祷（13〜15）

キリスト信仰を妨害する者と、キリスト信仰者の対照がはっきりしています。

ユダの手紙を理解する

1 この手紙を書いたユダ

「ヤコブの兄弟ユダ」。ヤコブはヤコブの手紙を書いた主の

兄弟ヤコブ。したがって、ユダも主イエスと兄弟。マタイ13:55に「この人は大工の息子ではないか。母はマリアといい、弟たちはヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか」とあり、ユダの名前が記されています。

2 執筆の時と場所

この手紙はペテロの手紙 第二よりも後に書かれたと思われます。時期は70年から80年の間。執筆場所については不明です。

3 執筆事情

ヤコブ書と同様に、各所に散在していたユダヤ人信者にあてて書かれたと思われます。最初は「私たちがともにあずかっている救いについて：書こうと」（3）準備していましたが、異端の教えが入ってきたのでこの手紙を書く必要を感じたのです。この異端はペテロの手紙 第二に見られるものとよく似ています。異端者たちは道德的に放縱な生活をしていました。

4 この手紙の特色

旧約偽典の『モーセの昇天』からの引用（9）、『第一エノク書』からの引用（14、15）がありますが、ユダはこれらの偽典を正典として受けとめていたのではなく、当時読者によく知

られていたから引用したのです。3節の「聖徒たちにひとたび伝えられた信仰」は1世紀後半に、すでにキリスト信仰の体系が確立していたことを示しています。

5 ユダの手紙のメッセージ

キリスト信仰を妨害する者と、キリスト信仰者の対照がはっきりしています。

①妨害する者

不敬虔で世的な者・神の恵みを放縱に変える肉肉的な者・唯一の主なる神を否定する者・権威ある者たちを軽んじ、栄えある者たちをそしめる者・ぶつぶつ不満を鳴らす者・へつらつて人をほめる者・御霊を持たず、生まれつきのままの者。

②信仰者

最も神聖な信仰の上に自らを築き上げる・聖霊によって祈る・神の愛の中に自分を保つ・神のあわれみを待ち望む・神のために魂を導く・神の守ってくださる力にゆだねる者。最後の祝祷は圧巻です！

6 梗概

あいさつ（1、2）

信仰の危機の到来（3、4）

さばきの先例（5〜7）

異端者たちに対する非難（8〜16）

信仰者たちへの励まし（17〜23）

祝祷（24、25）

ヨハネの黙示録を理解する

1 黙示録を書いた人

ヨハネ福音書、ヨハネの手紙の記者である使徒ヨハネが本書の記者です。

2 黙示録の書かれた時と場所

ローマ皇帝ドミティアヌスの迫害の時代。紀元96年、ドミティアヌス死去の頃と推定。執筆場所はパトモス島。エペソから南西90キロのエーゲ海上の島。南北16キロ、東西9キロの三日月形をした小さな島。迫害でこの島に流されていたヨハネが、幻を示されてこの書を書きました。

3 この書の執筆の事情

1・11にあるように、主イエスご自身が直接、ヨハネに書き送るように命令をされました。ですから「ヨハネの黙示録」は厳密には「イエス・キリストの黙示録」。主イエスが当時迫害の中にある小アジアの諸教会の信徒を励まし、キリストとその王国が最後に勝利を得ることを示されました。その勝利

は、主の再臨によってもたらされるものです。

4 この書のあて先

直接的にはアジアにある七つの教会（1・4、11）。しかし、必ずしもこれらの教会に限定する必要はありません。これらの教会に代表される全ての教会にあてて書かれたと考えられます。

5 この書の特徴

この書は新約聖書における唯一の預言の書です。「黙示（1・1）」とされているように、普通の書とは異なり、象徴的表現が多く用いられています。また、数字の「七」がしばしば出てきます。「七つの教会」、「七つの封印」、「七つのしるし」、「七つの災害」、「七つのラッパ」、「七つの鉢」、「七つの新しいこと」などです。

6 この書の解釈

この書は難解の書とされ、解釈も種々あります。この書の解釈を大別すると四つです。

①過去派 本書の記事は過去の歴史においてすでに終わった事実の記録と見る説。

②歴史派 使徒時代から歴史の終末まで世と教会との闘争の歴史を描いたとの説。

③理想派、精神主義 実際の出来事についてはなく、キリスト者は悪の勢力と戦うとの説。

④未来派 1・19に立つ説です。「それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ」。今後起ころうとする世の終末の出来事は4章以下に記述。この解釈が最も一般的で、また本書を理解する上で最も適切であると考えられます。

7 ヨハネ黙示録のメッセージ

(1) 栄光の主の顕現に触れた者（1章）

七つの金の燭台（教会）の間に立たれるお方。この主を拝し、ヨハネは倒れます。栄光の主を拝し、触れ、み声を聞く。それが迫害の中の勝利の秘訣です。

(2) 7つの教会へのメッセージ（2、3章）

七つの教会のそれぞれの書簡に、宛先、主のお姿、主が知られる美点、責むべき点、警告、約束などがあります。御霊のみ声を心にとめましょう。

①エペソ教会 「初めの愛に帰れ」

②スミルナ教会 「死に至るまで忠実であれ」

③ペルガモン教会 「悔い改めよ。そうしないと…彼らと戦おう」

④ ティアテイル教会 「持つているものを堅く保て」

⑤ サルデイス教会 「白い衣を着せられる」

⑥ フィラデルフィア教会 「冠をだれにも奪われるな」

⑦ ラオディキア教会は現代の教会とも言われます。なまぬるく、自分のみじめ、貧困、盲目を知らないのです。譴責のない教会はスミルナ教会とフィラデルフィア教会のみでした。

(3) 天上の礼拝のメッセージ (4章)

ヨハネは御霊に感じ、目は開かれ、霊界を見ます。教会が下界の苦難と試練と闘争の中から測り知れない栄光の輝きの中に携^け奉^まされます。24人の長老は贖^{あが}われた聖徒の代表です。冠を投げ出し、み前にひれ伏し、礼拝する姿こそ真の礼拝者の姿です。

(4) 巻物の封印を開くお方 (5章)

悪魔により失われた地を贖^{あが}うお方はユダ族の獅子、ダビデの根、屠^ほられた子羊なる主イエスのみです (5・7)。「屠^ほられた子羊こそは：ふさわしい！」天上の大賛美、大礼拝です。

(5) 封印の開封 (6、7章)

いよいよ、教会が天に携^たえ上げられたのち、地上に起こる患難時代の出来事です。第1の開封は「勝利の白馬」 第2

は「戦争の赤馬」 第3は「飢饉の黒馬」 第4は「死の青白馬」 第5は「殉教した人々の靈魂の叫び！」 第6は「天変地異と子羊の怒り」。

第6と第7の開封との間に一つの挿話。「印を押された者は十四万四千人」(7・4)は選民の救い、後半あらゆる国民、つまり異邦人の救い。そして、全天をあげての賛美と礼拝です。子羊の血こそ天国への門鑑です (7・14)。

(6) 七つのラツパ (8・3～11・19)

七つの封印の開封から、七つのラツパの審判と七つの鉢の審判とが続きます。今や8章からは第7の封印が解かれ、新段階に入ります。

まず、第7の封印の開封です。聖徒の祈りとその答えの天の挿話が入ります。そして、いよいよ、ラツパが順番に吹かれます。第1のラツパは「雹^{ひょう}と火が降る地の災」。第2のラツパは「火の燃える山のための海の災」。第3のラツパは「星が落ちた川の災」。第4のラツパは「日、月、星の暗黒」。そして、残る三つの災の予告が入ります。

9章に入ると、第5のラツパは「底知れぬ所の穴から上つて来るいなごの災」。第6のラツパは「不思議な騎兵隊の災」。第6と第7のラツパの前に、10章の霊界の除幕、主イエス

のご顕現（10・1～3）。ヨハネはこの栄光の主から巻物を受けて食べます。11章に入ると二人の証人の殉教と復活、昇天です。

(7) 天上の戦いと地上の迫害（12章）

第7のラツパで奥義は完成し、この世の国はキリストの国となりました。ですから、第7のラツパで、歴史は栄光の終結となりました。12章からは別の幻で、別の方面から終末の預言がなされます。それは「大きなしるしが天に現れた」（12・1）という天の栄光から始まり、サタンに従った国民のさばきで終わっています。

15章から19章では、ここでも「また私は、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た」（15・1）という天の栄光から始まり、世のさばきをもって終わっています。

(8) 悪魔の三位一体（13章）

13章では、神を汚す名の獣が出現。「竜」（13・2）は父なる神に対する悪魔（12・9）、「獣」（13・1）はキリストに対する反キリスト、「別の獣」（13・11）とは聖霊に対する悪霊とも云えるでしょう。しかし、このサタンも再臨の主が地上に降臨して世をさばかれる時に裁かれます。このことがぶどうの収穫に例えて記されています。

(9) 七つの鉢のさばき（16章）

16章には「七つの鉢のさばき」を見ます。第1の鉢は「腫れ物」。第2は「海の生き物の死」。第3は「水が血に変化」。第4は「太陽の炎熱」。第5は「暗黒と苦痛」。第6は「三つの汚れた霊」。そして、第7の鉢は「稲妻、雷鳴、地震、霊によるさばき」です。ハルマゲドン（メギド・殺害の山）（16）に集つての戦いです。そして悪魔に支配されたこの世は審判を受け、悪魔帝国「バビロン」は滅亡し天上で大賛美がわき上がります。

(10) 子羊の祝宴、千年王国（19章）

悪魔の帝国「バビロン」が滅ぼされるとき、天に「ハレルヤ・コーラス」がわき上がります。そして、子羊の婚宴の時が来ます（19・6、7）。子羊なるキリストとその花嫁である教会は完全に一つとされます。そして、20・2にあるようにサタンは束縛され、千年の間、地上にキリストの王国が建設されます。イザヤをはじめ、旧約時代の多くの預言者がそのことを預言しました。地に戦争がなくなり、動物の間にも平和があります。「御国をきたらせたまえ」との祈りはこの時に完全に成就するのです。

(11) 新天新地 (20～22章)

千年王国の終わりに、サタンの解放があり、最後の大審判が行われます。死んでいた大いなる者も小さい者も共に、神のみ前に立つのです。そして、死人はその仕業に応じ裁かれます。いのちの書に名が記されていない者は、みな火の池に投げ込まれます(20・14)。勝利を得た者と裁かれ捨てられる者とは明確に二分されます。そして、聖なる新しいエルサレムは天から下って来ます。神は共に在す。涙も、死も、悲しみも、叫びも、痛みもない新天新地の世界が開かれました。

もう聖所はありません。都全体が聖所です。日や月の光は必要がありません。神の栄光の輝きが都のすみずみに照り輝いています。神と小羊のみ座からいのちの川は流れ、すべてのものを生かすのです。呪われるべきものは何一つありません。

8 本書の梗概

緒言 1・1～3

七教会への書簡 1・4～3・22

天上の礼拝 4・1～5・14

封印の開封 6・1～8・2

七つのラッパ 8・3～11・19

天上の戦いと地上の迫害 12・1～18

海からの獣と地からの獣 13・1～18

天における賛美と審判の告知 14・1～20

七つの鉢のさばきの準備 15・1～8

七つの鉢のさばき 16・1～21

バビロンの審判 17・1～19・3

子羊の婚宴 19・4～10

地上再臨の主 19・11～16

反キリストと従者たちの審判 19・17～21

千年王国 20・1～15

新天新地 21・1～22・5

結びのことば 22・6～21

9 警告と励まし

これらの預言は信ずべきです。深く深く心にとめるべきです。「御霊と花嫁が言う。『来てください。』。私たちのうちに聖霊がお住みであれば当然、主イエスの来臨を切に待ち望むのです。『しかし、わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください！」

(※「牧羊者・二〇〇六年度Ⅳ巻」に掲載されたものを、一部再編集して掲載しました。)

聖書 イザヤ40・21〜26

タイトル 創造者なる神

暗唱聖句 あなたがたは目を高く上げて、だれがこ

れらを創造したかを見よ。イザヤ40・26

目 標 神が万物の創造者であることを覚えて生

きる。

導入

(土屋開夫)

皆さんはいつもどこを向いて歩いていますか？

先生は子どもの頃、下を向いて歩いてばかりいました。「何か落ちてないかなあ」と思っていたのです。時々、10円を見ついたり、壊れたオモチャ（グリコのオマケ）を拾ったりしましたが、下を向いても大したものはありませんでした。

最近の人は、スマホばかり見えていますね。道を歩いている、電車に乗っても、家にいても。まるでスマホというオバケにとりつかれたかのようです。でもスマホを見ていても、やっぱりそこに大したものはないのです。

上を見上げる

最近、先生はよく上を見上げます。お休みの日にお散歩をよくしますが、お天気の良い日は最高です。空を見上げると、なんときれいな空色（スカイブルー）でしょう！そこに白い雲が色んな形で浮かんでいると、空色と白の配色がまた良いのです。

そして夜、夜空を見上げると、結構たくさん、明るくて大きな星が輝いていることに気づきます。そして月も実はかなりキレイであることに最近気づきました。

そんなふうに、空や雲や、月や星や、その他にも花や可愛い動物や、可愛い子どもたちを見る時、「いやー、神様、あなたは素晴らしい芸術家（アーティスト）ですねー」と思わず、手を叩きたくなります。

そうです。上を見上げる時、天を見上げる時、神様を見上げる時、宇宙と地球の全てを造られた本当の神様のすごさ、素晴らしさを心に感じます。

今日の暗唱聖句を読んでみましょう。

「あなたがたは目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。」（イザヤ40・26）

自分ではなく、神様を見上げる

これは旧約聖書のイザヤ書のみことばです。預言者のイザヤさんがみ言葉を語った当時も、イスラエルの人々はいつも心は小さく怯えていたかも知れません。なぜなら、アッシリアのような大きくて強い敵の国がいつ自分たちの国に攻めて来るかも知れなかったからです。イスラエルは小さな国なので、昔からいつも周りの外国を恐れていました。イスラエルの人々の目は、いつも上を見上げるといふより、自分に向いていたのかも知れません。「自分はダメだ。自分たちは弱い。力が無い。知恵も無い。元氣も無い。勢いも無い」と。

けれども神様は言われます、「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。」と。「この全宇宙を造り、その一つ一つを支配している、真の神であるわたしを見上げなさい。信頼しなさい。」ということなのです。

このイザヤ書には、他にも素晴らしい約束のみ言葉がいっぱい書かれています。次の41・10には、「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。」

43・4には、

「わたしはあなたを愛している。」と書いてあります。

つまり、この全宇宙を造られた偉大な神様が、私たちを愛していただくさりと、私たちと共にいて、助けてくださるのです！なぜでしょう？この神様は、私たちの天のお父様だからです！

まとめ

今の時代は特に、私たちを恐れさせたり不安にさせることがいっぱいあるかも知れません。皆さんにも、子どもには子どもの悩みや不安がいっぱいあることでしょう。でもそんな時、下を向くのではなく、自分の小ささを見るのでもなく、ましてやスマホやネットばかりを見るのでもなく、上を、天のお父様を、そしてイエス様を見上げましょう！天のお父様には何でも出来るのです。どんなピンチの時でも、あなたを助けることが出来るのです！そしてイエス様が私たちのお祈りを天に届けてくださいます。心を天に向けると、不思議と「大丈夫だ」という安心が与えられますよ。

♪祈ってごらんわかるから♪

(PW7、新聖歌481、イン70、GS35)

聖書 イザヤ40・21～26 テーマ 創造者なる神

序論

(小泉 創)

イザヤは神から離れた神の民に、さばきと回復を伝えました。神を忘れた民には、神を思い出す必要があります。この個所でもイザヤを通して神の姿が語られます。

一、天地を造られた主(21～22)

現代はネットで様々なことを容易に知ることができません。見たことのないものも調べられ、行ったことのない場所の写真も見ることができず。しかし地球上の動植物や、まだ人が分け入ったことのない場所のことはもちろん、とても身近な私たちの体のことも、心のことで知り尽くせません。

そのすべてをおつくりになったのが神様です。不思議にあふれているこの世界の上に座しておられるお方、すべてのものをおつくりになった偉大なお方です。他の何者も神に代わることはできません。

〈あなたがたは知らないのか。聞いていないのか〉。

これは神を知っているはずの神の民に語られている言葉です。彼らは知らされている神を捨てて、偶像の神々を信じるようになりました。それらは何の力ももたず語ることもないむなし存在にすぎないのです。あなたは誰に、何に信頼しているのか、と問いかけています。

二、人のかなさ(23～24)

ここでは、神の民に押し迫る大国、その権力者たちがどんなに力を誇って、自分は神のような力を持つと胸を張ったとしても、風に吹きつけられるとたちまちの内に消え去っていくはかない存在であることが指摘されています。はかなく、過ちをおかす存在であるにも関わらず、自分には何をすることもゆるされていて、何でもコントロールできると考えているとしたら、とんでもない思い上がりです。神の恵みによって生かされている私たちなのです。

人は本来、「生めよ、増えよ。地に満ちよ。地を従えよ」(創世記1・28)という神の命令のごとくに、この世界を正しく管理することを願われていました。しかし、愚かにもおごり高ぶり、神をおそれることを忘れて、好き勝

手にむさぼるようになりました。それは現代でもますます深刻な問題を引き起こしています。公害、環境破壊の問題は繰り返されています。制御しきれない原子力の問題、クローン技術や命の選択など生命倫理に関わる問題もあります。人は有限なほかない存在で、過ちもおかすのです。

三、神を仰ぎ見よ(25～26)

偉大な神の目には、ほかない存在である人間がどのように映っているのでしょうか。驚くべきことに、神は人間を見放すことをせず、関心を持ち愛し続けてくださいました。(その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって呼ばれる)とありますから、私たちを知って下さるのです。

目を高く上げて(26)偉大な神を仰ぎ見ましょう。神はあわれみ深く、ほかない人間に目をとめ、罪をきよめ、いのちを与え、どのようなところからも新たにやり直させることができます。どのような人をも神の子として迎えてくださり、力を得させることのできる(31)恵みにあふれた神です。

私たちは思いがけない出来事に襲われます。道を外れる時も、希望を見いだせないようなときもあります。そのときに力強い神を見上げるなら、そこに新しい希望があるのです。

結論

困難の中になると、それがいつか終わることも、落ちていた日々が再び訪れることも、想像できなくなり、しかしすべてのものを治める、力ある神がおられます。その方は、捕囚の民をも回復させることができます。死に打ち勝ち、新しいいのちを与えることのできる神を仰ぎ見ましょう。そして恵みの中で新たな力をいただきましょう。

研究資料

(金井由嗣)

神を知ることの大切さ

本日から三回にわたって、聖書が教える真の神について学ぶ。ウィルクス師は『救霊の動力』の中で、異教国日本の伝統的な神観念が宣教の大きな妨げとなっていることを指摘している(第12章「偶像崇拜」)。み言葉の光に基づいて、神についての正しい理解を持つ必要がある。

万物を創造された唯一の真の神を知るとは、単なる知識にとどまらずその人の世界観の根底となり、信仰者の生涯を支える大きな土台である。そのことについての最良の書物としてJ・I・パッカー『神を知るといふこと』を推薦する。キリスト者として一度は読んでおきたい本である。創造者として神を知ることの意義については『聖書神学事典』の「創造」の項目を参照。

文脈

40章から始まる、神の民イスラエルの解放を告げる慰めと救いのメッセージの一部である。直接にはバビロン捕囚からの帰還を示しているが、終末的メシア預言をも含んでいる(鍋谷)。9〜11節でその「慰め」をもたらす

神に聞き手の注意を向けさせ、12〜31節ではその神が創造者であることが救う力の根拠として示されている。この主題は43〜44章で詳しく語り直される。

テキスト

21 あなたがたは知らないのか。聞いていないのか。：告げられていなかったのか。悟っていなかったのか。

四つの否定疑問文が並んでいる。最初の二つの動詞はシンプルな未完了形、あとの二つは完了形で、きれいな並行法が用いられている。前半の二つの動詞を新改訳と聖書協会共同訳は現在形に、新共同訳は「知ろうとせず聞こうとしないのか」と意思の問題として訳している。文法的には新改訳が原文に近いが、後半の「告げられていなかったのか」「悟っていなかったのか」は反語であり、「(実際にはモーセ以来預言者たちを通じて) 伝えられていたではないか」との非難を含んでいる。新共同訳はそれに対応して、「(聞かされていながら)知ろうとしなかった」民の不信仰を責める言葉に訳している。

22 主は、地をおおう天蓋の上に住む方。創造者である神が被造物を超越した存在であることが語られている。物理的な距離や広さを表現に用いるのは当時の人々

の語彙で語るためであって、語られているのは本質的な意味での神の超越性である。「創造は創造者と被造物を厳然と区別する神の行為であり、それは神を超越的存在として認識させ得る。…唯一神は超越神となり、多神は汎神ないしは万有在神となる。これは一に、創造神信仰の有無にかかっている。」(『聖書神学事典』)

23 君主たちを無に帰し、地をさばく者たちを空しいものとされる。神の超越性は地上の権力に対しても示される。「君主」と「さばく者」、「無に帰す」と「空しいものとする」は強調のための並行法であり、厳密に区別する必要はない。神の民を支配するバビロンの巨大な権力も神の前では「無に等しい」と宣言されているのである。

24 彼らが植えられ、時かれ、根を張ろうとするとき、主はそれに風を吹きつけ、彼らは枯れる。地上の権力の栄枯盛衰のはかなさを表現しているが、それもまた神の主権のもとでの出来事として描かれている。

25 聖なる方 ここでは創造者・超越者なる神の自称である。「聖」(ハ)カドシユの基本的な意味は「区別する」であり、被造物から厳然と区別される神こそ「聖」という言葉にもっともふさわしい方である。イザヤ書で26回も

使われている「イスラエルの聖なる者」という表現も心に留めるべきである。わたしをだれになぞらえ、だれと比べようとするのか 神が超越者である以上、被造世界の何ものとも比べることはできない。異教の神々や、地上の支配者を真の神との比較の対象とすること自体が神への冒瀆なのである。

26 目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ 実際に神の創造された天を見上げることが求めている。万象 直訳は「多くの軍隊」であるが、ここでは空にある無数の天体を比喩的に表現している。照明のない当時の夜空に広がる天体を数え尽くすことは不可能だったが、創造者である神はそのすべてを「数えて」呼び出し、「一つも漏れるものはない」。創造者である神が被造物を支配する力に限界はないことが示され、その神が自分たちを解放し守るお方であることに思いを向けよ、と命じている。

参考図書 鍋谷堯爾『人間イザヤとその思想』、同『イザヤ書注解』、モテア(ティンデル)、ワイブレイ(ニューセンチュリー)、Oswalt (NICOT)。

聖書 イザヤ6：1〜7

タイトル 聖なる神

暗唱聖句 聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。

その栄光は全地に満ちる。イザヤ6：3

目標 神が聖なるお方であることを覚えて生きる。

導入

(土屋開夫)

だんだん夏らしく暑くなってきましたね。夏の太陽はギラギラと眩しいですね。決して直接見てはいけませんよ。眩まぶしすぎて、目が悪くなっています。

ところで、太陽の表面温度は何度が知っていますか？約六千度だそうです！（ちなみに太陽の中心は一六〇〇万度）

私たちの住んでいる地球は太陽から約一億五千万kmも遠く離れているので、「暖かいなあ。ちょっと暑いなあ」と感じるくらいですけども、もし、太陽のすぐ近くに行ったら、どうなっちゃうでしょう？ きっとスグに焼け死んでしまうことでしょう。

聖なる神様を見たイザヤ

今日の聖書の場面では、イザヤさんという預言者がそれよりもっと大変な経験をしました。なんと、太陽よりもっとスゴイ、本当の神様を近くで見ってしまったのです！

旧約聖書の時代(ウジヤ王の死んだ年：紀元前750年頃)に、イザヤさんはすごい光景を見ました。それは天国の幻だったのかも知れませんが、高い高い王様の席に、主なる神様がおられるのを見ました！ いったい、どんなお姿だったのでしょうか。眩しすぎて、その輝きしか見えなかったかも知れません。

そして「セラフイム」という6枚の翼を持つ天使たちがいました、その天使たちでさえ、2枚の翼で顔をおおい、もう2枚で足をおおわなければなりませんでした。そのセラフイムたちが、こう言っていました、

「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。

その栄光は全地に満ちる。」(3)

主なる神様は、「父なる神様、子なる神様(イエス様)、聖霊様」の三位一体ですから、3回「聖なる」と言ったのかも知れません。

聖なる神

ところで「聖なる」とは何でしょう? 「聖なる」とは、神様の本質を表す言葉です。難しいですね。簡単に言うと、「神様は、どんなものよりも、高い、高い、高い、高いお方」ということです。太陽だって神様が造ったのですから。

その「聖なる、聖なる、聖なる」神様をイザヤさんは見てしまったのですから(と言っても、衣の裾の方だけだったかも知れませんが)、大変です!

イザヤさんは恐れに恐れ、震えながら言いました、「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民に住んでいる。しかも、万軍の【主】である王をこの目で見たのだから。」(5)

イザヤさんはこの神様の光(栄光)の前に、自分の心の罪が示されました。「こんな心も言葉も罪で汚れている私などは、この聖なる神様の前には、跡形もなく焼き尽くされてしまう!」と思ったのでしょうか。

すると、セラフイムの一人が、神殿の祭壇に燃えている炭を(セラフイムでも直接持てないので)火ばさみで持ってきました。

イザヤさんは「この炎で焼き滅ぼされる!」と思ったでしょう。ところがその炎は、イザヤさんの唇にだけ、ちよんと触れました。イザヤさんは一瞬「アチツ」と思っただかも知れません。するとセラフイムが言いました、「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」(7)

なんと祭壇の炎は、イザヤさんの全身を焼き尽くすのではなく、イザヤさんの罪だけを焼き尽くしたのです!(実はこの祭壇は、イエス様の十字架を表しています。)

まとめ

聖なる神様は、色んなものを聖なるものにして下さるのです! 「神様のもの」になる時、それは「聖なるもの」になります。あなたの手にあるその本は、神様の本なので「聖書」です。そして私たちが「神様のもの」にされる時、「聖徒」と呼ばれます。イザヤさんの罪がきよめられ、「聖徒」となったように、私たちも救い主イエス様を信じる時、罪がきよめられて「聖徒」になるのです!

♪せいなる せいなる♪(こ8、こ改12、新聖歌137)

聖書 イザヤ6・1〜7 テーマ 聖なる神

序論

(石田高保)

イザヤはユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤと約50年にわたって預言者として働いた人物です。王に直言できる立場にありました。既に預言者だったイザヤですが、ある日神殿で礼拝をしていると、思いがけなく神様から預言者として改めて召されることになりました。

一、聖なる神を見る

イザヤは礼拝している最中に、神殿の天井をはるかに突き抜けた天空の王座にいる神様の栄光を見ます。顔が見えたわけではありませんが、その衣の裾が神殿に満ちていることからしても、そびえ立つお姿であることが察せられます。突然のことでもあり、思いもよらない光景を見たイザヤは畏れおののきました。これまで何度も礼拝をささげてきたことですが、神様の栄光を見たことに、ただ圧倒されるばかりだったことでしょう。それほどかセラフイムという御使いの姿も見ます。彼らは神様のいちばん近くで賛美する奉仕を担っており、イザヤは聖

なる神をたたえる彼らの賛美を聞くことになります。

当時、神様や御使い、それに類する神的な現象を目にしたら、人間は打たれて死ぬものと考えられていました。ですからこのときイザヤは「ああ、私は滅んでしまおう」とうめいたわけです。そして神様の聖さに圧倒され、自分の心の汚れに向き合わざるを得なくなります。彼はこれまででもいけにえをささげる儀式の中で罪の悔い改めをしていたでしょう。しかしこのたびは聖なる神様の著しい臨在に触れたとき、あれこれの罪ではなく、自分という存在自体の罪深さを思い知らされました。彼はこれからどうやったら解放されるのだろうかともだえ苦しみます。私たちも大なり小なり同じようなところを通ったのではないでしょうか。これはイザヤのように聖なる神様の前に自分の汚れを見せられた体験と言えます。

同じような出来事が新約聖書にあります。ペテロはイエス様の言うとおりに網を下ろしたところ、思いがけない大漁となったので畏れて言います「主よ、私から離れてください。わたしは罪深い人間ですから」(ルカ5・8)。ペテロはイエス様の中にこの世ならぬ神聖なものを感じておののいています。

もちろん神は愛なる方ですから、人類に一人残らず無条件の愛を注いでおられます。たとえ愛が感じられないという人があっても、神はその人のことを目に入れても痛くない存在と見ておられる事實は変わりません。しかし同時に神様は聖なる方ですから、私たちの罪を見過ぐすことはできませんが、悔い改めるならすぐに赦そうと待ち構えておられます。交わりは回復されます。

二、聖なる神に赦される

みずからの罪深さに悔い崩れているイザヤに、セラフイムのひとりが燃えている炭を手を携え、彼の唇に触れて言います「あなたの罪も赦された」。現実にこのようなことをしたら、大やけどを負います。もちろんイザヤは何の害も受けませんでした。これは灼熱の炭が神のきよめる力を象徴しており、口に触れたことで言葉に代表される罪深さをきよめたということになります。しかも、セラフイムは「あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された」と明確に宣言しています。

私たちにおいても神様は聖なる方ですから、罪を取り除かれなままに近づくことは許されません。しかしただ一つ神様に近づく道があります。セラフイムは聖所の

祭壇から燃えている炭を持つてきました。私たちにはイエス様の十字架という祭壇から血潮が注がれ、「私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます」(ヘブル10・19)。十字架は神様のきよさも表しており、その前に自分の罪深さを示されます。悔い改めと罪の赦しを受け取ることによって神様から義と認められます。これまでいっさいの罪と汚れは帳消しにされ、神様からイエス様のゆえに100%受け入れられるのです。

そしてクリスチャンとなった人は「あなたの罪も赦された」という神様の宣言を折にふれて受け取り続けるのです。「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめ(続け)てください」(Iヨハネ1・7)。

結論

イザヤは聖なる神様に出会って自分の罪深さを探られますが、同時に罪の赦しの宣言を明確にいただきました。この時から彼は預言者として再任命され、背信のイスラエルに遣わされます。イザヤでなくてもクリスチャンの誰もが生活の現場に遣わされています。そこでイエス様の愛と聖さを体現し、神さまへの憧れを喚起することができます。

研究資料

(辻林和己)

イザヤ6章のこの個所は預言者イザヤの見神(ビジオ・デイ)の体験を告げる。イザヤが礼拝のため神殿にいたときの体験であろう。神がご自身の聖なることを顕わされ(聖臨在)、イザヤが祭壇の火できよめられたことが語られる。

テキスト

1 ウジヤ王が死んだ年に 紀元前740年(諸説あり)。アハズ王の時代である。ウジヤ王は優れた資質に恵まれ、ユダ王国の繁栄を取り戻した中興の祖とも言うべき人物であった。しかし、後年、神殿の神聖を汚し、重い皮膚病となった(Ⅱ歴代26・16〜22)。私は、…主を見たことでの「主」は(ハ)アドナイ。イザヤは栄光の主の臨在に触れたのである。使徒ヨハネは、この「私は、…主を見た」の個所をイザヤがイエス・キリストの栄光を見て言ったものと解している(ヨハネ12・41)。

2 セラフイム 御使いを意味する(ハ)セラフの複数形。ケルビム(出エジプト25・18〜22等)やミカエル(ダニ

エル10・13、21等)とは区別される。語源的には「燃える」という意味。六つの翼のうち顔をおおう二つは「礼拝(敬虔)」、足をおおう二つは「謙遜」、飛びかけるための二つは「奉仕」を表していると考えられる(山室軍平『民衆の聖書』、バックストン『説教集』等参照)。

3 聖なる 「聖なる」は(ハ)カードーシユ。これは形容詞であるが動詞「聖とする」は(ハ)カードアシユ。異論はあるが、原意は「分ける」というのが通説。神が神以外の一切のものから「分けられている(隔絶されている)」、すなわちイスラエルの神の超越性と唯一性を示す。

万軍の主 単に御使いを従えて戦う主のことではなく、天と地のすべてを支配する御方という意味。栄光(ハ)カーボード) はイザヤの好んで用いた言葉で、イザヤ書全体で38回も使われている。ここでは、主の栄光は天ではなく 全地に満ちる と叫ぶ。

5 ああ 口語訳では「わざわざいなるかな」と訳されている。神の聖さと栄光の前に自分の罪深さを示されたイザヤの叫び。自分の存在そのものが「わざわざい」であることを示された。私は滅んでしまふ ここでは「滅びる」(ハ)ダマー)の完了形が用いられている。「私は滅んだ」

のであり「滅んでいる」のである。イザヤは自分が罪人であり、霊的に死んだ者であることを自覚した。**唇の汚れた者** 唇は、言葉と心の象徴。唇が汚れていることは心が汚れていることを意味する。**唇の汚れた民** イザヤは、自分の心が汚れているだけでなく「民（イスラエル民族）」の心も汚れていることを告白する。

6 祭壇 これは全焼のいけにえの祭壇、または香をたく祭壇。燃さかる炭の「火」は汚れを除くものであり、神の聖を示すものである（申命記4・24、ヘブル12・29参照）。

7 これがあなたの唇に触れたので 燃えている炭が、イザヤの最も弱く、最も汚れたところに触れた。これは神の救いのみわざがイザヤの人格全体になされたことを示す。**あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された** 「咎」は〔**ア**〕アウウォーン。口語訳では、「悪」と訳されている。セラフイムの語る言葉は、イザヤの罪が贖われ、汚れが除かれ、聖なる神の御前に立ちえる者、神の御用に携わる預言者としてきよめられたとの宣言であった。

そしてこの後に、イザヤは主の派遣の御声を聞き、それに応える（8）。

神の祭壇の火によってイザヤがきよめられたことは、罪の汚れのきよめはただ神の恵みによってであることを示している。イザヤがそうであったように、罪深い私たちができることは、罪の悔い改めと自己絶望の告白だけである。イザヤの罪の赦しときよめは、主イエスの十字架による贖いの先取りである（ローマ3・24、エペソ2・4、5）。

火は罪を焼き尽くし、きよめる聖霊の象徴である。イザヤが火によってきよめられたことは、ペンテコステの先取りでもある。ペンテコステの日、弟子たちの上に臨んだ聖霊は「炎のような舌」であった（使徒2・3）。主の十字架と聖霊によって私たちは罪赦され、きよめられた。「義と聖と贖いになられ」（1コリント1・30）た主イエスによって私たちは聖とされ、神の臨在に触れることができるのである。

参考図書 鍋谷堯爾「イザヤ書」『新聖書注解』（いのちのことば社）、服部嘉明「イザヤ書」『新実用聖書注解』（いのちのことば社）他

聖書

Iヨハネ4・7〜11

タイトル

愛なる神

暗唱聖句

神は愛だからです。

Iヨハネ4・8

目録

十字架に示された神の愛を覚え、神を愛し、人を愛して生きる。

導入

(後藤 真)

聖書の中には「愛」ということばが何度も出てきます。今日読んだところには十三回も出てきます。でも「愛とは何ですか?」と聞かれるとなかなか簡単には答えられません。それに、みなさんがだんだん友だちとおしゃべりするとき愛の話はあまりしないのではないのでしょうか。そんなふうには頭で考えると難しい愛ですが、愛がよく分かる方法があります。それは、愛されることです。だれかに愛されてみると、愛がどのようなものかよくわかるようになります。今日のお話を通して「神様に愛されている」と感じる事ができればと願っています。

愛されるうれしき

遠足の日、お母さんやお父さんが、早起きして大好き

なおかずを詰めたお弁当を作ってくれたらどう思いますか。うれしいですね。つらいことがあったとき、友だちが話を聞いてくれたらどう思いますか。心が軽くなりますね。愛されるというのは、だれかが自分のことを思っている時間や力を使ってくれることです。その気持ちが変わるととてもうれしくなります。

逆に、施設にいるおばあちゃんに会いにいつて喜ばれたり、困っている友だちを助けたりすることもあります。相手のために思って、自分の時間や力を使うことが愛するということなのです。その気持ちが届くと相手はうれしい気持ちになります。

愛するということは、心の中で思うだけではなくて、気持ちを行動に表すことなのです。

神様の愛

では、神様の愛とは何でしょうか。神様はわたしたちのことをどのように思っていて、それをどういう行動に表してくださったのでしょうか。今日の聖書にはこう書かれています。

「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私

たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。」

また、このようにも書かれています。

「神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥^{なだ}めのさげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

神様は私たちのことを大切に思っています。わたしたちに永遠の命を与えたいと思っています。そしてわたしたちの罪を赦したいと思っています。それで、ひとり子であるイエス様をこの世界に送り、神様といっしょに生きる幸せを教えてくださいました。そしてそのイエス様を十字架にかけて罪を赦すためのさげ物にしてくださいました。

わたしたちは小さなことをしてもらっただけでも、愛されているなあ、うれしいなあと思います。それならば、十字架にイエス様をつけてまで、わたしたちを救った神様の愛はどんなに大きなものでしょうか。神様がどれほどわたしたちを愛して下さっているでしょうか。

互いに愛し合う愛

わたしたちは神様にびっくりするような愛で愛されま

した。神様の大きな愛を思うとき、神様を愛する気持ちがわいてきます。神様のために何かしたいなあと思う人もいるでしょう。その気持ちをぜひ、まわりの人たちに向けてください。

難しいことはしなくてもよいのです。話を聞いてあげたり、聞いてもらったり。困ったことがあったら助け合ったり。神様に大切にされているように、お互いを大切にするといいことが愛し合うということです。

わたしたちの愛は神様に愛されていることから生まれます。自分の力で親切にしようとすることは違います。神様に愛されていることを忘れていたら、愛し合うことができませぬ。(ここで、CS教師自身が神様に愛されていると感じた経験を自分のことばで子どもたちに分かち合ってください)。

神様に愛されているって素晴らしいですね。この愛を受け止めて互いに愛し合いましょ。お祈りします。

♪両手いっぱい愛♪

(ホ146、イン41、PW13、新聖歌483)

聖書 Iヨハネ4・7～11 テーマ 愛なる神

序論

(大頭真一)

神は愛なるお方。CS教師はこの「お方」に注意を払いたい。マクグラスはこの「人格神」の概念をキリスト教信仰の核心の一つに挙げている(「総説 キリスト教」237頁以下)。人格ある神は単なる知識として知ることはできない。神は人格的な関係すなわち交わりを通してのみ知ることができる。それゆえ神と交わりをなすに神を語ることはできない。メッセージは交わりの結果であって、交わりなしのメッセージはあり得ない。交わりの中に神を体験し、体験した神の手ざわりを子どもたちに伝えよう。それが命を与えるメッセージなのだから。

一、一方的な愛

〈私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し〉とある。聖書の最初には「はじめに神が天と地を創造された」(創世記1・1)とある。罪を犯した人に神は「あなたはどこにいるのか」(同3・9)と呼びかけられた。旧約時代を通して神は、顔をそむけるイスラエルに預言

者を送り続けた。聖書は神の物語であり、その主語は神である。そして時至って、神はご自身の御子を送ってくださった。神は人間を捜し求めるあわれみの神なのである。あわれみの神は、私たち一人ひとりが滅びていくのをじっと見ていることがおできにならないのである。

二、犠牲的な愛

それゆえ神は〈私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました〉。父なる神と子なる神はひとつである。「神がご自分の血をもって買い取られた神の教会」(使徒20・28)とある。つまるところ三位一体とは、私たちには理解できない不思議な方法によって、神ご自身が犠牲となってくださったことに尽きる。神は私たちのために何も惜しむことをなさらなかった。子を供え物とする父として、父に供え物にされる子として、神は十字架の苦しみを何重にも味わい尽くしてくださった。何という愛だろう。

三、私たちの生き方を変える愛

「完了した」(ヨハネ19・30)との主イエスの叫びは、創世記3・15の預言の成就である。ヘブル書には「そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イ

エスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした」(2・14(15)とある。私たちは悪魔の奴隷であった。悪魔は私たちに、神以外のものに存在理由を求めさせようとする。他の人よりすぐれた業績や学歴、容貌や持ち物がそれである。それらを失うときは生存の根拠を奪われるときだと悪魔はささやく。死の恐怖である。こうして私たちは被造物にしがみつきの、たがいに競い、ねたみ、他人の転落を喜ぶ。勝ったと言っては高ぶり、負けたと言ってはいじける。

けれども、神は私たちを解き放つ。神ご自身の血はあらゆる被造物への依存から私たちを自由にする。それが、アルコールや薬物、セックスへの依存であれ、ゆがんだ人間関係や持ち物、他人の評価や偶像への依存であれ、悪魔の支配からの解放は「完了した」のだ。悪魔は十字架でキリストのかかとを砕いたけれども、キリストは同じ十字架で悪魔のかしらを砕いたからである。

今も悪魔は存在する。けれどもその支配力はすでに滅

ぼされた。だれでもキリストの十字架を信じる者はもはや悪魔の奴隷ではない。神のかたちをとりもどし、たがいに心から、愛し合うことができる。自分より優れた人に対しては、その人から良きものを受け取ることができるゆえに、その人を喜ぶ。また、自分よりも劣った人に対しても、その人に分け与えることができるゆえに喜ぶ。私たちはだれにも自分の存在理由を証明する必要がない。なぜなら、神がそれ以上ない証明をしてくださったからである。それが十字架である。十字架にあらわされた神の愛がその証明なのである。

結論

信じるとはあわれみの神のあわれみの中に自分をまらごと投げ込むことである。マタイ15章を見よ。「あなたの信仰は立派です」(28)という主イエスのお言葉は、ただ神のあわれみを求めたカナン人の女に与えられた。大人も子どもも決して滅びてはならない。主イエスを信じて死ぬようなことが決してあってはならない。涙をもって子どもたちのためにとりなしつつ、真つ正面から福音を語ろう。

研究資料

(宮澤清志)

今月は、「神」という単元のみ言葉が語られている。特に、神がどのようなお方であるのかに焦点を当てて語られる。

愛は、神の属性の中の一つであり、特に神が人間との関わりにおいて表される道徳的属性の中の代表的なものである。この神の、人間に対する愛について、パークレーは次のように述べている。①愛は神の本質である。②神の愛は「普遍的な」愛である(ヨハネ3・16)。③神の愛は「犠牲」の愛である(Ⅰヨハネ4・9)。④神の愛は、私たちが「それに値しない」愛である(ローマ5・8)。⑤神の愛は「あわれみ」の愛である(エペソ2・4)。⑥神の愛は「救い」と「きよめ」の愛である(Ⅱテサロニケ2・13)。⑦神の愛は「力強い」愛である(ローマ8・37)。⑧神の愛は、それから「引き離すことはできない」愛である(ローマ8・39)。⑨神の愛は「報いを与える」愛である(ヤコブ1・12)。⑩神の愛は「訓練」の愛である(ヘブル12・6)。神の愛についてこれらの箇所を引きながら思いを巡らすこともまた有益であろう。

さて、この手紙の執筆事情についてであるが、この手紙を使徒ヨハネが書いた時、キリスト教は広くローマ帝国に広まっており、大きな影響を及ぼす宗教となっていた。当然、その当時ローマを支配していた哲学や思想体系と福音を結び合わせようという努力もなされた。その結果、キリスト教の内部にも異端が入り込むことになった。ヨハネはそのような異端と戦うために本書を執筆したものと考えられている。また、当時の教会は偽教師に対する脅威にも直面していた。これらの異端や偽教師の主張に対して、神は光であり、愛であること、そしてイエス・キリストは神の御子であり、真まことの人であることを明らかにするために、ヨハネは本書を執筆したのである。

テキスト

7 この節では愛の源が取り上げられる。愛の源泉と言ってもいい。キリスト者が互いに愛し合う理由の一つが「愛は神から出ている」からだというのである。冒頭に示した「神の愛」とは、神をその源としているのである。愛する者たち ヨハネ特有の呼びかけであり、この短いヨハネの手紙の中に六回登場する(2・7、3・2、21、4・1、11)。この呼び方は、非常に重要な問題が取

り扱われる時に使われている。なお、直訳では「神に愛されている者よ」という意味である（永井訳参照）。

8 ヨハネはしばしば逆説的な表現によって、その重要なポイントを表現する。隣人や他者への愛を考えたこともない人は、自己愛のみで、自らを絶対化しているのを神を知るはずはないのである。神は愛だからです 「愛」には冠詞がついていない。神の愛は一つの特質としてではなく、本質そのものであることを示すものである。一方、「神」には冠詞がついている。このことは、神は愛であるが、愛は神ではないことを示している。

9 ヨハネ3・16を思い起こさせる個所である。この個所の原文の文頭は「これをもて神の愛は、我等のうち^{あつち}に顕^{あは}れたり」（永井訳）の意味である。この個所の中心は、神の愛の顕^{あは}れである。どこにも神の御手が見えない、神の御声が聞こえない、そのような中でも、神の愛はイエス・キリストにおいて歴史のうちに明らかにされているのである。この節に登場する神の愛は、自己犠牲の愛であり、他者の益になるための愛である。

10 9節同様、日本語の聖書では語順の逆転が起こっているが、本来の語順では、ここに愛がある が文頭にく

る。神の愛とは、前節に示されているように自己犠牲の愛である。この自己犠牲の神の愛は、神ご自身の主導性の元に示された愛であり、御子を私たちの罪のための宥（なだ）めのささげ物としてお遣わしになったという先行する愛の行為に、神の愛を見るのである。

11 この手紙には、互いに愛し合うべきです というように、何回かの命令形が登場する。しかし、これらはいずれも外的な強制による命令ではない。そうではなく、このようなキリストの愛を受け入れた者の内面からの応答によるのである。互いに この言葉を、「キリスト者の「外に」の意味に理解するのではなく、キリスト者の「内」の外にいる者たち」への愛と理解したい。なぜなら、愛の模範は罪人のために死なれたキリストであり、私たちはキリストが愛されたように他者を愛するべきだからである。真の意味でのキリスト者の愛は、囲いから外へと出て行く愛である。

参考図書 ハワード・マーシャル「聖恵・聖書注解シリーズ1『ヨハネの手紙』」（聖恵授産所出版部）、レオン・モリス「愛 聖書における愛の研究」（教文館）他

聖書

創世記7・1～24

タイトル

みんなで入ろう、救いの箱舟

暗唱聖句

あなたとあなたの全家は、箱舟に入りな

目 標

さい。
創世記7・1箱舟なるキリストを信じ、その救いの中
に入る者となる。

導入

(後藤 真)

みなさんは、船に乗ったことがありますか。お客さんと自動車に乗せる大型フェリーは、お風呂もレストランもあって、とても楽しいですよ。聖書の時代にも、そんな今の大型フェリーと同じくらい、大きな船を作った人がいました。ノアです。

神様の決心

神様は、とてもつらい気持ちでした。

「わたしを信じ、愛し合い、正しく生きてほしいと思って人間を造ったのに、人の心に思うことは悪いことばかりだ…」神様は人間を造ったことを後悔しました。そしてついに、この地上から人を滅ぼしてしまおうと決心しました。

けれども、神様はノアに心を留めました。ノアは神様の気持を考えて生活していたからです。それで、ノアに大きな箱舟を作るように命じました。ノアと家族、そして動物たちを救うためでした。とても長い時間がかかってノアが箱舟を完成させたとき、神様は言いました。

「あなたと、家族は箱舟にはいりなさい。動物たち、鳥たちも箱舟に入れなさい。」

ノアと動物たちが箱舟に入ったとき、神様が箱舟の戸を閉めました。それから40日。毎日毎日雨が降り続きました。雨はとうとう山の上をこえるまでに増えました。人も、動物も、箱舟に入らなかったものは、だれも生き残ることはありませんでした。

ノアとノアの妻。ノアの三人の息子、セム、ハム、ヤペテ。そして、セム、ハム、ヤペテの、それぞれの妻。合わせて8人と、動物たち、鳥たち。箱舟に入ったものだけが残りしました。魚やかえる、エビやイカは箱舟には入りませんでした。水の中で生きられるものは、洪水になってもだいたいぶだったのでしょうか。

神様の命じられたように

ノアはすべて神様の命じられたとおりにしました。お

どろくほど大きな箱舟を作るように言われたときも、そのとおりにしました。海から遠く離れた場所で、箱舟を作っていたノアたちを笑う人たちもいたかもしれせん。でもノアは神様の命じられたとおりにしました。

動物たちも神様が命じたとおりに、自分から箱舟に入りました。ノアは苦勞して動物を集めなくてすみませんでした。たった8人で、毎日毎日動物の世話をするこゝともとても大変だったでしょう。えさをやるだけでも一日が終わりそうです。でも、ノアは神様が箱舟に入れた動物たちを大切にお世話したに違いありません。

洪水が起こることも、箱舟に入って助かることも、全部神様の思いでした。ノアを洪水から救ってくださったのは神様です。ノアのがんばりで助かったのはありません。ノアはただ、疑わないうで、神様に従い、神様の救いを受け取ったのです。

みんなで入ろう、箱舟に

水で地上のものを滅ぼしたことは、神様にとつてとてもつらいことでした。それで神様は人が心に思うことはよくないけれど、こんなふうには世界を滅ぼすことはやめよう、と決めました。その決心を守り、二度とわたした

ちを滅ぼさないうですむように、神様はイエス様を十字架にかけてくださったのです。神様は、つらく苦しい思いをして、わたしたちを救おうとしてくださったのです。

神様がこれほどまでにしてくださった愛を、むだにしなくありませんね。わたしたちもノアがしたように、疑わないうで、イエス様の救いの箱舟に入りたいと思います。イエス様を信じ、十字架の救いを信じて生きるなら、だれでも救いの箱舟に入ることができるのです。

ノアの箱舟には、ノアの家族8人しか乗りませんでしたが、でも、イエス様の救いの箱舟には、人数の制限はありません。100人乗ってもだいじょうぶ！ それぞれどこか、世界中の人が乗ってもだいじょうぶです。

わたしたちも、みんないっしょに救いの箱舟に入りましょう。「わたしだけコッソリ乗ろう」「あの人にはいじわるされたことがあるから、誘わないうでおこう」なんてケチなことは言いつこなしです。家族やお友だちがみんなイエス様を信じるように、お祈りしましょう。

♪はこぶねにはいろう♪ (PW43)

聖書 創世記7・1～24 テーマ ノアの箱舟

序論

(石田高保)

聖書はノアから人類が再スタートしたことを教えているので、現代人はもれなくノアの子孫です。

一、神の招き

救いは神の招きから始まります。アダムからノアに至るまでの千年間、人類の罪は天に届くほどに積み重なり、神の度重なる悔い改めへの招きも拒み通し、加速度的に救いがたいほど墮落しました。そこで神様は人類を一掃し、新しく人間を創造しようとしています。しかしたった一人だけ神の前に正しく生きていた人が存在しました。それがノアであり、彼とその家族を選んで人類をやり直すことに決めました。

救いは選びから始まります。神様がまず私たちを救われるべき者として選んで下さいました。その理由は全くわかりません。選ばれたという事実でじゅうぶんです。そのように救いの主尊権は神様にあります。「神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選

び、御前に聖なる、傷のない者にしようと考えたのです」(エペソ1・4)、つまり私たちは天地万物が創造される前に、救われるようにと選ばれていました。今の時代になつて神様が思い付いて私たちを選んだのではありません。私たちが何の貢献もできない世の初めにおいて既に決められていました。一度選ばれた人が信仰生涯の途中でふるい落とされることは決してありません。もしふるい落とされるとするならば、神様は後出しじゃんけんをするズルい方ということになります。信仰によつて神の国に入ったのなら、信仰によつて天国に入るのが神様の約束です。神様が天地創造の前に私たちを救いに選んでいたので、その選びは永遠に失われません。

私たちがこんにちクリスチャンであるということは、私たちの熱心さによるのではなく、神の選びによります。なぜ選んで下さったのかは神秘です(かといって救いに選ばれないと定められた人もいません)。ただわかることは「神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました」とあります(1コリント1・27)。神の国・神と共に生きる世界ではこの世と逆転現

象が起きます。大人よりも子どもが偉いとされ、へりくだった人が治める人とされます。この世のシステムをピラミッド型とすれば、神の国は逆ピラミッド型となります。それは最初に神様が計画した人間社会です。私たちはその価値観で生きるようにと神様から選ばれました。

ノアが神の前に正しいという意味は神様から見て非の打ち所がなかったとか、完璧な善人であったということではなく、神様と共に歩もうと生きていたことです。聖書がなかった時代は、神様に心を開いている人間は、神様から直接語られていたと思われます。それも人生の分岐点になるような重大な選択に対してだけで、日常的ではありませんでした。それはアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフも同様です。いっぽう私たちは聖書を読めば、神様の語りかけをいつでも聞くことができます。

二、神の働きかけ

ノアが箱舟を完成させると神様の言葉がありました。それは家族と共に箱舟に入るようにという命令です。何十年も箱舟の建設に従事していたので、当時の人類はみなノアの仕事を聞きましており、ノアのメッセージも聞いていたはずです。それは「私たちと一緒に箱舟に入り、

やがて来る大洪水から救われよう」というものです。しかし残念なことに彼のメッセージに従う人は誰もいませんでした。神様は何十年にもわたって人々がみ許もとに立ち返るように忍耐して待っていました。今の時代の人々に対しても同じです。

また神様はノアに地上のすべての生き物を種類に従って一つが必ず箱舟に入れるようにと命じました。すると息を吸う生き物つまり家畜、動物、鳥、昆虫などが箱舟に入ってきました。それは洪水後の世界が生き物で満ちるようになるためです。

結論

神様の言葉から7日後、40日にわたって大雨が降り続け、大洪水となって地球上ぜんぶが水で覆われました。これによつて箱舟に乗っていたノアの一家と生き物以外の生き物はすべて死に絶えました。これはイエス様の救いを拒んだ人々が世の終わりに審判を受けることを暗示しています。しかし神様は人間が滅びることを決して願っていません。ひとりでも多く救われるために私たちが用いようとしているのです。クリスチャンは何もしなくても世界の光として光っています。自信を持ちましょう。

研究資料

(小平徳行)

箱舟によるノア一家の救いは、イエス・キリストによる救いをあらかじめ示したものである。キリストが再臨について語られたとき、ノアの時代を例にあげて警告を与えられた(マタイ24・37〜39、ルカ17・26〜27)。

テキストト

1 あなたとあなたの全家は ノアの家族も箱舟に入ることが許されたのは、ノアが正しい人であると神に認められたからであった。**正しい** ノアについては「正しい人で、彼の世代の中にあつて全き人であつた」と紹介されている(6・9)。「正しい」とは、人として神の基準にかなつたという意味。「全き」とは、完全な、健全な、誠実なという意味で、神に対して二心なく、誠実に信頼し、従う姿勢を意味する。罪のない完全ではない。

2 きよい動物 きよい動物と、きよくない動物との区別は具体的には明示されていない。きよい動物は種の保存のためだけでなく、ささげ物のためでもあつた(8・

20)。**雄と雌を七つがはずつ…雄と雌を一つがはずつ** 本文ではきよい動物については「七」という語が二つ連

ねて使われ、きよくない動物については「二」という語が一度使われている。「七(二)つがい」または「七(二匹)とも解釈できるが、きよい動物は雄と雌それぞれ七匹ずつで七つがい、きよくない動物は雄と雌それぞれ一匹ずつで一つがい(二匹)ということであろう。きよい動物は、食用や供え物用のため、多く必要であつた。

3 空の鳥 ここではきよいもの、きよくないものの区別はされていないが、8・20に「きよい鳥」とあることから両者が区別されていたことがわかる。

4 あと七日たつと 神の定めの際の厳肅な宣言であり、また七日間の猶予でもあつた。ここにノアの家族以外にも救われる可能性を与えた神の忍耐(口語訳では「寛容」)がある(1ペテロ3・20)。**四十日四十夜** 文字通りの期間と考えてよい。

5〜16 ここではノアが神から命じられたようにしたと、ノアとその家族、動物たちが箱舟に入ったことが繰り返されている。これにより、この場面の重大さと厳肅さを印象付けている。

5 ノアは、すべて「主」が彼に命じられたとおりに 箱舟を造る時から、家族とすべての生き物を箱舟に

入れるまで、洪水の兆候は見られなかったが、ノアは主に従い、すべてを信仰によって行った（ヘブル11・7）。

9 ノアのところにやって来た 動物がノアに連れてこられたのではなく、自発的にノアのもとにきた。かつてアダムのもとにすべての生き物が連れて来られた時と同様に（2・19）、神の御手がそこに働いていた。

11 ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日 洪水の始まりを正確に記そうとしており、この洪水が事実であることを強調している。大いなる淵の源 巨大な地下水源と考えられる。この大洪水は豪雨だけでなく、何らかの地の変動により地下より水が噴出したことにもよることを示している。天の水門が開かれた 先の「大いなる淵の源」とあわせて、「大空の下にある水と大空の上にある水」（1・7）を連想させる。

13 ちよどごその日に：箱舟に入った 神はご自身の民の安全が確保されるまではさばかない（19・22参照）。

16 【主】は彼のうしろの戸を開ざされた ノアの背後から戸が閉められた。箱舟の戸を閉ざしたのは主である。これはノア家族の救いのための主の保護の御手であると同時に、それ以外の者たちに対しては恵みの門戸が

閉ざされ、救いの可能性がなくなったことを示す厳粛な瞬間である（マタイ25・10、ルカ13・25）。

20 山々はおおわれた 神は人間が逃れ得る場所を残さなかった。神の救いを拒むならば、他に救いはない。

23 消し去られ（ヘマーハー） 地上の生き物はただ死んだのではなく、消し去られた。これは罪を取り除いて地をきよめることを強調している。Iペテロ3・21では洪水の水は「バプテスマの型」としている。つまり、洪水によって罪深い世界は葬られ、箱舟はその中に浮かび、ノア一家は救われた。これは古き人がキリストとともに死に、キリストとともに新しいいのちに生きる者としてよみがえることを象徴している。

この出来事は、罪人に対する神の招きの型である。キリストという箱舟はすでに用意されている。洪水の激しさは神のさばきの激しさを示しているが、それに耐えられる箱舟はキリストによる救いの確かさを思わせる。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』（いのちのことば社）、パゼット・ウィルクス『創世記講演』、A. B. Simpson, 「The Christ in the Bible Commentary Vol.1」 他

聖書 創世記12・1～9

タイトル さあ、出発だ！

暗唱聖句 あなたは、あなたの土地、あなたの親族、

あなたの父の家を離れて、わたしが示す

地へ行きなさい。 創世記12・1

目標 罪から離別し、神の導きに従って生きる

者となる。

導入

(後藤 真)

結婚したり、会社で働き始めたり、学校に進んだり。みなさんのお兄さんやお姉さんで、家を出て引越した人もいるかもしれませんね、今日のお話は、そんなふうに住み慣れた町から出て、新しい土地に出ていった人、アブラムのお話です。

神様のことば

神様は、アブラムに言いました。

「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福と

なりなさい。わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

神様は、アブラムを選び、アブラムから生まれる子孫を増やし、一つの国にすることに決めたのです。そしてアブラムとその子孫の国を通して、世界の国の人々を祝福する、このことです。これは、神様のことを思わないで悪いことばかり考える人間を、洪水で滅ぼすのではなく、救い、祝福するためでした。そのために神様はアブラムに新しい土地に行くように命じたのです。

アブラムの心配

みなさんがアブラムだったらどうですか？

「ハイ、分かりました。いますぐ出発します」

と言えますか。そんなに簡単には言えないような気がします。まず、アブラムは75才でした。新しい土地に行くって新しい生活するには、もう少し若いときの方が良いように思います。引越しだつてとても大変です。だいたいアブラムが住んでいたハランは、大きな川があり、作物もたくさんとれ、とても豊かな土地でした。神様が行くようにというカナシが、住みやすい土地かどうか分

7月

30日 礼拝メッセージ例

かりません。

それに、カナンの土地には、もともとそこに住んでいる人がいます。アブラムたちが行って、「ここに住みますよ」と言っても、「オレたちの土地に入って来るな!」と言われるかもしれません。アブラムひとりが行くのならしいかもしれません。でも、家族も召使いも、家畜もみんな行くのですから、とても広い土地がいるのです。

また、アブラムには子どもがなく、子孫が増えるようには思えませんでした。長い間ハランに住んでいたアブラムは、お父さんのテラが、本当の神様ではなく、月の神様を拜んでいることも知っていました。そんな自分に、神様が話しかけて、こんな大きなことを約束するなんて、とても信じられないことだったでしょう。

主が言われたように

それでもアブラムは、神様が言われたように、出発しました。妻のサライ、おいのロト、すべての財産、家畜、召使いたち。すべて持って、住み慣れたハランを出発したのです。それは「もうハランには戻らないぞ」という決心のあらわれでした。アブラムの心配がなくなったわけではなかったでしょう。でも、アブラムの心には、た

だ神様を信じる気持ちがありました。神様なら、こんなびつくりするような約束をその通りにする力がある。神様は、かならずいちばん良くしてください。だから、神様についていこう。そう思ったのではないのでしょうか。

「アブラムは特別に立派な人だから神様についていたのだ。ぼくには無理だ」と思う人がいるでしょうか。そんなことはありません。アブラムは、大きな失敗をしたり、神様を疑ったりしてしまいます。でも、神様は、そんな欠点があるアブラムを導き、訓練して成長させます。そしてアブラムは「アブラハム」と名前が変えられ、「信仰の父」とまで、呼ばれるようになるのです。

わたしたちも、神様についてゆくことができます。自分の思い通りにしたい気持ちや、礼拝よりも遊びに行く方が楽しいなあという思いがあるかもしれません。それでも、神様について行きましょう。神様はわたしたちを通して、神様の祝福をまわりの人に分けたいと願っておられるのです。そしてそれができるようにわたしたちを成長させてくださるのです。

♪歩こうイエスの道を♪ (イン81、PW15)

聖書 創世記12・1〜9 テーマ アブラハムの旅立ち

序論

(小泉 創)

誰かと会うことで、私たちは何かしら変化するのだと聞いたことがあります。喜ばしい出会いも、そうでない出会いも、私たちに何かを生じさせます。

ましてや神様との出会いは、私たちに大きな変化をもたらせます。信仰の父と呼ばれるアブラハム(アブラム)の人生も、神様と出会い大きく変えられていきました。

一、神の命令と約束

アブラムは父テラとともにカルデヤのウルを出しましたが、カナンへの途中、一家はハランにとどまりました。ウルもハランもメソポタミアの偶像礼拝が行われる地であって、父テラも偶像礼拝に関わる一人でした(ヨシユア24・2)。ハランで、神様はアブラムに声をかけられました。それは父の家を離れてわたしの示す地に行きなさい、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福の基とするとの約束でした。神様はご自分の民を起

こすために、アブラムを選ばれたのです。

当時の75歳は今とは違うかもしれませんが、それにしても新しい一步を踏み出すことは容易ではなかったに違いありません。父テラと別れ、慣れ親しんだ地を離れ、多くの人間関係と別れを告げることは、生活の基盤、保障を手放すことに他なりません。それでもアブラムは神に従い、行き先も知らずに出て行きました。

「信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。」(ヘブル11・8)。

その決断は、何よりも主なる神様に信頼していくことをあらわしていました。神様だけ信頼して、見たことのない道に歩を進めるということは大きな挑戦です。後に信仰の父と言われるアブラムの一步であり、信仰の冒険の始まりです。

神様と共に歩む私たちにも決断が迫られることがあります。慣れ親しんだつながり、安全、守りを手放し、信頼して間違いない神様と共に一步を踏み出すのです。

二、祝福の基となる

神様はアブラムを大いなる国民とし、祝福の基とする、とおっしゃいました。それはアブラムの子孫だけが幸せになる、ということではありません。罪によって神様から離れてしまったこの世界に祝福をもたらせるために神の民は立てられ用いられるのです。

この祝福の基の約束は、イエス・キリストが来られたときに、神様の祝福が民族を超えてすべての人々に及ぶことを指し示しています。主イエスを通して神の民とされた私たちも、祝福の基とされています。

三、神を礼拝する

アブラムがカナンの地についたとき、神様は「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」(7)と約束の言葉を語りかけてくださいました。その実現にはしばらくの時間と戦いが必要となりますが、アブラムはその約束を受けて、主のための祭壇を築き、主の名を呼んで礼拝を捧げました。神様のゆるしと導きによって、カナンの地にたどりついたアブラムです。世界をお造りになった神様は、行き先を知らずに旅をしたそのことを全てご存

知でした。アブラムその地での生活も神様が支えて導いてくださったのです。この先、アブラム夫妻には様々な出来事に出会います。勇気をもつてのぞんだときもあれば、おそれて失敗することもありました。それでも神様は彼らを見放さず導き続けてくださいました。

神様はわたしたちが遣わされているところからどこでも、どんなときでも、私たちとともにおられます。ですから私たちはどこでも神様に礼拝をおささげし、それまでの守りと導きを感謝し、それから先の道のりも主に期待するのです。

結論

私たちも神様の恵みによって祝福の基とされました。そして私たちも神様によってさまざまなところに遣わされます。遣わされたところでいつも神様に礼拝をおささげし、御前にへりくだり、神と共に生きましょう。

7月

30日 聖書講解

研究資料

(小平徳行)

聖書全巻に貫かれている中心的なテーマの一つは「聖別する神」である。バベルの塔以降、再び罪と混乱に陥った人類を神の救いの恵みに導くために、神はアブラムを聖別された。救いの出来事は神の言葉と人間の信仰と従順によって形づくられる。1〜3節はアブラムの召命、4〜9節は彼の従順について記されている。

テキスト

1 **「主」はアブラムに言われた** この命令と約束は、使徒7・2〜3によると、彼がハラニに住む以前のウルに住んでいた時に語られたことになる。しかし4節によればハラニで語られたと考えられる。以上からアブラムがすでにウルで与えられていた命令をハラニで再び示されたと考えてよい。**あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて** この命令は徹底した分離を要求している。父の家を離れ土地を手放すとは、生活の保障を手放すことを意味しており、信仰のテストであった。**わたしが示す地** カナン地の方向であることは分かっていたが、アブラムにとって未知の地であった

(ヘブル11・8)。

2 **大いなる** 数だけでなく、神の前の偉大性も意味している。**国民**(**ヘ**ゴイー) 領土と民を含む言葉。一般には異邦人の国々を指すが、ここでは特に他民族と比較してイスラエルの国の偉大性を語るために用いたと考えられる。アブラムに対する約束は、アブラム(の子孫)が大いなる国民となること、そして地上のすべての部族が彼(の子孫)によって祝福されることである。神の祝福は、その人だけのものではなく、その人を通して多くの人々に及ぶものである。

3 **わたしは、あなたを祝福する者を祝福し** アブラムは人々が彼をどのように扱うかによって、人々の定めが決まってしまうような立場に置かれることになった。**地のすべての部族は、あなたによって祝福される** これは後に、キリストを信じるすべての者(異邦人であっても)が義と認められるようになることによって成就する(ガラテヤ3・8)。

4 **「主」が告げられたとおりに** アブラムの単純率直な従順を表現している。故郷、親族から離れ、行き先が不明確な中で従うことは困難なことである。それにもか

かわらず従ったのは、やみくもな行為ではなく、最善をなさる神への信仰によるものであった。アブラムは現在または将来の生活のすべてを主の御手にゆだねたのである。**ハラ**ン メソポタミヤの都市で商業の中心地。ウル同様、月神を主神とする偶像崇拜の地であった。アブラムの父テラも偶像崇拜を行っていた(ヨシユア24・2)。

5 すべての財産 もはや戻ることはないという決意の表れ。

6 その地を通って アブラムの旅は、まずカナンの地の中部にあるシェケムまで入り、さらにベテルとアイの間を通って(8)、南の極限ネゲブまで及ぶ(9)。ヨシユア24・3において、主がアブラムを「カナンの全土を歩かせ」と言われている。カナンの全土がアブラムに与えられることとし(13・17参照)。**シェケム** ゲリジム山とエバル山の間谷間にある要地。**場所** (へ)マール(コーム) 通常は単に「場所」を意味するが、文脈によって特別な意味を持ち得る。新共同訳では「聖所」と訳されている。**モレ** 「占うもの、導くもの」の意。**樫の木** 樹齢、数百年〜千年で高さ15メートル位まで成長する。神木としてカナンの祭儀の中心であったといわれる。ア

ブラムはカナンの宗教の拠点に祭壇を築き、真の神の臨在を示したのである。**その地にはカナン人がいた** カナンの地は無人の野ではなかった。

7 あなたの子孫に この「子孫」は単数形で、単数の意味にも、複数の意味にも用いられる。これはアブラムの子孫であるユダヤ人を指すが、究極的にはイエス・キリストを指す(ガラテヤ3・16)。**この地を与える** 「わたしが生ずる地」(1)がここであることを示す。カナン人がすでに住んでいたことは、神の約束を疑わせるものとなり得たが、神はアブラムを励ますために約束を更新し、強調した。**祭壇** 約束の地において最初に築かれたのは礼拝の場であった。

8 天幕 地上にあつては旅人、寄留者としてテント暮らしをした。この世は安住の地ではない。これは祭壇と同様に彼の生涯を象徴するものであった(へブル11・9、13参照)。

9 ネゲブ 「南」と訳されているものもある。現在の死海の南西に広がる乾燥した高地。約束の地の南限。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』、小畑進「創世記講録」(以上のちのことば社)、他

聖書 創世記26・12〜22
柔和な心で歩もう

タイトル 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。 マタイ5・5

目標 神に信頼して、柔和な生き方を身につける。

導入

(飯田勝彦)

今日は原爆記念日です。今から78年前広島に原子爆弾が落とされ多くの人たちが無くなりました。また、9日は長崎に原爆が落とされた日でもあります。8月は特に平和を考えると、人と人との平和は、まず自分の心が柔和であることが大切ですね。

皆さんは、自分の心を点検することがありますか？「あの人はいつも怒っている」「あの人はいつも文句ばかり言っている」などと、人のことはよく見ます。でも、案外自分の心も他の人と同じようになっていくかも知れませんね。私たちの心が守られ、穏やかであることを祈ります。皆さまは願っておられますか。イサクの姿から神さまのメッセージに耳を傾けてみましょう。

祝福されたイサク

イサクは、アブラハムの息子です。12〜13節を読んでみましょう。ここで分かることは、イサクは非常に裕福であったと言うことです。彼が土地に種をまけば、百倍の収穫があり、14節では「羊の群れや牛の群れ、それに多くのしもべを持つようになった」ともあります。イサクは祝福に満ちた人でした。この祝福はイサクが努力して得た祝福ではなく、主が彼に与えられた祝福だったのです。

私たちは祝福されているでしょうか？ イサクのように財産を持っていないかも知れませんが、でも、イエス・キリストが与えられています。エペソ1・3に「神はキリストにあつて、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました」と祝福が約束されています。皆さんは、この約束が自分のことであると信じますか？

ねたまれたイサク

祝福に満ちていたイサクでしたが、彼はペリシテ人からねたまれました(14)。皆さんは誰かをねたんだことがありますか？ 「ねたま」ことは良いことではありません。

せん。でも、「ねたむ」ことがどんなことを体験している人は、ペリシテ人の気持ちがよく分かると思っています。テストで自分よりも良い点を取った人をねたむ、体育で自分よりも上手くできる人をねたむ、たくさん友だちがいる人をねたむ、自分よりも良い物を持っている人をねたむ、私たちの周りにはねたむ材料がいっぱいあります。また、誰かからねたまれたこともあるでしょう。イサクをねたんだペリシテ人は、イサクに何をしましたか？その時、イサクはどんな気持ちだったでしょうか？

柔和なイサク

ペリシテ人から井戸をふさがれた後、イサクはゲラルの谷間に移動し、そこで井戸を掘りました。しかし、ゲラルの羊飼いがやってきて井戸のことで争いになりました。イサクはまた井戸を掘ります。しかしまた、争いがあったのです。イサクは、三度も井戸をめぐって辛い思いをしました。井戸を掘ることは重労働です。せっかかく掘った井戸が奪われてしまう。皆さんならどのような態度をとるでしょうか。

22節を見るとイサクは、さらに井戸を掘ったことが分かります。それについては、争いがなかったのです。主

に祝福されたイサクは、ねたまれ、争いを持ちかけられることが多々ありました。しかし、それでもイサクは力づくで井戸を奪い返したり、相手に対して嫌味をぶつけたりしたことはここには記されていません。

それはイサクが、多くの財産を持ち裕福であっただけでなく、彼の心も豊かであったからでしょう。主はイサクの生活と一緒に心をも祝福し彼を柔和にされたのです。

まとめ

ねたみや争いが激しくなるほど、私たちの心は波立つことがあります。自分の力で柔和になることはできません。私たちが柔和になれるとするなら、柔和であるイエス様に信頼することです。私たちはイエス様を信じてつながらるとき、柔和なイエス様によって心が守られます。ですから、心が波立つとき、私たちの心を支えてくださるイエス様を信頼して「イエス様、私の心を守ってください！」と助け求めることです。

今週も、イエス様が与えてくださる柔和な心に支えられて歩みましょう。

♪わたしは主の子どもです♪ (ホ88、イン51)

聖書 創世記26・12～22 テーマ イサクの井戸

序論

(福井文彦)

神は飢饉うきえの時に、イサクに対してエジプトへ行くなと命じられ、従ったイサクを祝福されました。ところが寄留者イサクがあまりに繁栄するので、土地のペリシテ人の妬みねたを買い、彼らはアブラハムが掘った井戸をふさぎ、迫害します。その後にも移ったゲラルの谷で同じようなことが起こります。そこでイサクは信仰の柔和をもつてさらに移ります。神はそのイサクを祝福されたのです。

一、主の祝福と試練

飢饉があつたにもかかわらず、イサクがその地(ゲラルのアビメレク王の地)に種をまくと、その年百倍の収穫を得ました。このような収穫は考えられないことであり、まさにこれは主の特別な祝福でした。これはリベカのことでの失敗をイサクが悔い改めた証拠であり、主の恵みでした。

このようにしてイサクは豊かになり、ますます富み栄えました。富は時として人々の妬みを招くことがあります。

す。この場合もそうでした。ペリシテ人たちはイサクの富み栄えるのを見て、妬みました。彼らはイサクからその理由を聞いて、その信仰に倣うのではなく、妬んで迫害したのです。

そこで彼らは、イサクの父アブラハムがしもべらに掘らせた井戸をふさいでしまいました。この当時、井戸を掘るといことはなかなか大変ことであり、この井戸を中心に生活が営まれていたのです。井戸の水を人が飲むだけでなく、家畜も飲みますから、井戸をふさぐという事は、大きな迫害でした。ペリシテ人たちは、この井戸をふさぎ、その土地から去らせ、イサクに与えられた祝福をどめようとしたのです。

二、イサクの柔和

その土地の人々は、先代の王がアブラハムとの間に立てた契約(21・22～30)を無視したのです。そしてイサクにその土地を去るように要求しました(16)。彼は争いを好まぬ人ですから、一言も抗弁せず、すぐそこを去り、ゲラルの谷へと移りました。

そこでイサクはアブラハムの時代に掘られ、その後ペリシテ人がふさいだ井戸を新たに掘り直したのです。と

ところが、ゲラルの羊飼たちが（この水はわれわれのものだ）と主張すると、イサクはまたそこを去りました。

そこでもまた井戸を掘りました。ところがそれについても争いが起こり（21）、イサクはそこからも移ってほかの井戸を掘ったのです。彼は次々に譲歩して、決して争うことはしませんでした。

井戸を掘ることが容易なことではなかった当時、イサクは争いを好まず、ほかの人に譲歩できる人でした。このようにイサクは、確かに信仰による柔和な人でありました。

三、信仰による柔和

主イエスは山上の説教で、「柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです」（マタイ5・5）と教えられました。

国語辞典は、「柔和」を「やさしく、おだやかなさま」とげとげしい所のない、ものやわらかな態度・様子」と説明しています。では、イエスが言われた「柔和」とはどのような意味でしょうか。

①神に対して謙虚であることです。神の摂理に対して恨みませんし、不平を言いません。また反抗することな

く、自暴自棄にならず、失望しません。神の摂理に対して静かに耐え忍ぶのです。

②いつも神のみこころに対して従順に従います。ヨセフは兄たちに売られてエジプトに行つて苦勞し、言うことのできないようなくやさしきで胸がつぶれるような環境の中におりましたが、一言も不平を言いませんでした。

③柔和は御霊の実の一つです（ガラテヤ5・23）。柔和な人は、他人に対してなごやかな優しい態度が現われます。優しいことばで語り、不当な取り扱ひを受けても、耐え忍んで喜んで、受け入れます。他人に寛容、温和で、自分を誇大評価しませんし、自己主張もしません。尊敬され、敬われることも期待しません。

イエスのご自身の柔和にふれられましたし（マタイ11・29）、主の柔和のクライマックスは、十字架の上で表されました（1ペテロ2・22〜23）。

結論

イサクが神に祝福されたのは信仰による柔和によるのです。私たちも最も柔和であられた主イエスを仰いで、柔和を学び、神に聞き従い、聖霊に満たされ、神の祝福にあずかりましょう。

研究資料

(宮澤清志)

今週与えられている聖書の個所を理解するには、それまでの背景をも同時に理解する必要がある。イサクも、

アブラハムと同じ契約を受け継ぐためには、やはり父アブラハムと同じように訓練され、訓練を通される必要があった。当時、飢饉きんげんのときにはエジプトに下るのがごく自然のことであったし、現にアブラハムもそのようにした(1、12・10)。しかし、アブラハムのときとは異なり、主は「エジプトへ下つてはならない」(2)と仰せられたのである。主の解決方法は、人物や時代により異なる。人間的にはどんなに安全で確かな方法と見えたとしても、神の御心のみが唯一の祝福への道である。だから、ここでも「主が最善を備えてくださる」という信仰が試されているのである。その結果、イサクは「この地に留まなさい」(3)という主の命に従って、ゲラルの地に留まる決心をする。

しかし、そこでやはり父アブラハムと同じあやまちを犯すのである(8・11、12・10)。このことは、父アブラハムの弱さがその子イサクにも臨んだことを示してい

る。それは、罪の性質がその子に伝わることを示すと同時に家庭環境の大切さをも示す実例でもある。しかし同時にこのような失敗を通して、自らの弱さと主のご介入を学ぶことは意味のあることである。

テキスト

12 エジプトへ下るな、という神の命令(2)に従った結果、イサクは神が約束された祝福(3)に与あずかることになる。当時、イサクの身の上に起こった飢饉(1)がどの程度のものなのかわからないが、その飢饉の結果、イサクは「地に種を蒔く」という行動に出たのであろう。

その地 ゲラル(1、6)。見た(ハ)マーツァー) 口語訳聖書では「得た」とある。この言葉は、種をまいてから世話をして収穫をする、という現代の農業のあり方ではなく、種をまいたらあとは収穫の時に行つてその収穫を見るという程度の農業のあり方を指している。**百倍の収穫** 豊作の年の妥当な収穫量であったといわれている(マルコ4・8参照)。しかし、この祝福は、「主は彼を祝福された」とあるように、明らかに神の恵みによるものである。

14 羊の群れや牛の群れ、それに多くのしもべ 12節の

収穫以上に、この言葉はイサクの真の職業が牧畜中心であったことを示している。羊や牛の群れが増えた結果、多くのしもべを雇う必要が生じたのであろう。

15 この節以降、「井戸」が中心的な役割を担っている。驚くほどの穀物を得(13)、多くの羊や牛の群れを養い(14)、そして多くのしもべとともに生活したイサクにとつて、水は生命の源であつたに違いない。井戸はすなわちその生命の源としての役割を果たしていたのである。父のしもべたちが掘った井戸 アブラハムの掘った井戸については、既にその当時のアビメレクとの間に正式に合意ができている(21・27、30(31参照))。

16 イサクの祝福と、その祝福へのペリシテ人の妬^{ねた}みの結末は、ついにはイサク追放という事態にまで発展する。われわれより、はるかに強くなったから ペリシテ人にとつて、イサクは脅威に映つたのであろう。

18 アビメレクにより追い出されたイサクは、ゲラルの谷に移住した。そこで アブラハムの時代に 掘って埋められた父の井戸を再び掘つたのである。それは、イサクが多くの家畜の群れを所有しており(14)、その家畜を養うためには多くの飲料水が必要としたからであらう。

またこの井戸がアブラハムの井戸であるがゆえに、自らが使用する正当性もあると考えたのであろう。

20 エセク 「争い」「論争」という意味。しかし、直接的にはイサクではなく、イサクの羊飼いたちとゲラルの羊飼いたちとの間の争いであつた。

21 シテナ 「敵対」「敵意」など。20節での命名では、どちらかといえ目に見える形での「争い」であつたのに対して、今回の命名では、そのような目に見える争いの背後にある感情、あるいはその争いの根底にある部分^が命名の対象となつていると考えられる。

22 レホボテ 「自由の地」「広々とした地」「場所」「余地」という意。どこにいつても不和と衝突とを繰り返してきたイサクにとつて、衝突から解放され、広々とした地に到着できたことは、神の恵み以外の何ものでもなかった。旧約における救いの概念のひとつは「囲みを解かれる」ということである。この経験はイサクにとつても救いとなつたに違いない。

参考図書 デレク・ギドナー 『ティンデル聖書注解 創世記』、小畑進 『創世記講録』(以上いのちのことば社) 他

聖書

創世記28・10〜22

タイトル

天からのほしご

暗唱聖句

まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。

創世記28・16

目 標

共におられる神に目を向けて生きる。

導入

(和田牧子)

みなさんは「ひとりぼっちになっちゃった…どうしよう」という経験はありますか？ いつもいてくれる家族や友だちが見えたらなかったら、心配だし、さみしいですね。今日のお話の主人公、ヤコブはひとりぼっちで、途方にくれてしまいましたよ。ヤコブの気持ちになって聞いてくださいね。

ひとりぼっちになったヤコブ

ヤコブはイサクの子どもです。ふたごのお兄さんエサウがいます。当時イスラエルの国では、一番上のお兄さんには特別な祝福がもらえると、いう約束がありました。しかし弟ヤコブはお母さんのリベカと力をあわせて、エサウのふりをし、お父さんをだまして祝福を横どりして

しまいました。

かんかんになったお兄さんのエサウは、「お父さんが亡くなる日も近い。そうしたらヤコブを殺してしまおう！」と言いました。そうなってはたまりません。ヤコブはお母さんのアドバイスにしたがい、遠く離れた町に逃げることになりました。リベカお母さんのふるさと、ハラシという町です。

ハラシはこれまで住んでいたベエル・シェバという町から900キロほど離れていました。日本というと東京から本州の西のはて下関くらい離れているのです。初めて一人で家を離れ、ひたすら旅を続けるヤコブ。とても心ほそく、さみしくてたまりませんでした。みなさんは、一人でそんなに遠くへと旅したことはありませんか？

気がつくとも知らぬ町にきていました。誰も知っていない人なんていません。もう夜です。疲れはてたヤコブは野原で横になるしかありませんでした。枕は石です。痛そうですね。横になりながらいろいろなことを考えたでしょう。「お母さんはどうしているかな。」「エサウ兄さん怒っているだろうな。追いかけてきたらどうしよう！」そう思うとますます怖くて悲しくてたまらなかつ

たと思います。

天からのほしご

やがてヤコブは眠りにつきました。すると夢を見ました。みなさんはどんな夢を見ますか？ ヤコブが見たのはこんな夢でした。一つのはしごが地のの上に立てられました。そのいちばん上のはしごは天まで届いていました。そしてみつかいたちが、そのはしごを上ったり下りたりしていたのです。それだけではありません。主なる神さまがその上に立って、こう言われました。

「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主です。わたしは、あなたが横たわっているこの地をあなたとあなたの子孫に与えます。見なさい。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰ります。わたしは決してあなたを捨てません！」

とっても心強い言葉ですね。ヤコブは一人ぼっちだと思っていました。何とそこには父なる神さまがともにいてくださったのです。神さまがともにいてくださること…これほど安心なことはありません。ヤコブは言いました。「まことに主はこの場所におられます。それなの

にわたしはそれを知らなかった！」ヤコブの心の目が開かれ、今まで見えなかった神さまに目を向けることができたのです。ヤコブと神さまとの出会いの瞬間でした！神さまの方からはしごをおろしてください、ヤコブに「わたしはここにいますよ」と教えてくださったのです。

ヤコブは翌朝早く起きて何をしましたでしょう。自分が枕にしていた石をとり、それを記念に立てて石の柱とし、柱のてっぺんに油を注ぎました。心から神さまを礼拝したのです。そしてその場所をベテルと名づけました。ベテルとは「神の家」という意味です。風がひゅーっと吹き、心ほそかった野原が、何と「神の家」になったのです！

結び

もしみなさんが、ひとりぼっちだな…心ほそいな…と思う時があったなら思い出してください。主なる神さまがそばにいてくださることを。神さまは全世界の一人ひとりのことをちゃんとご存じで、目に見えなくても、確かに生きて働いておられます。「わたしは決してあなたを捨てません」と約束してくださいますよ！

♪神様といつもいっしょ♪(イン73)

聖書 創世記28・10～22 テーマ 天からのほしご

序論

(高橋頼男)

ヤコブは、母リベカと共謀し、老いた父イサクを偽って、ついに兄エサウから長子の特権を奪い取ってしまいました。だまされたイサクは怒りにふるえ、エサウは泣き叫んで、失った長子の特権を求めましたが、一度ヤコブに渡った祝福はもはや移り変わることはありません。エサウはヤコブを深く憎み殺そうと決心しました。それを知った母リベカは、ヤコブを遠いパダン・アラムの地に逃れさせました。

一、孤独な旅(1～5、10～11)

母と別れ、故郷を離れ、悲しみと不安を胸に抱いて一人旅するヤコブの心は、まことに切なくわびしいものでした。いまさらながら、兄に対する恐れ、老いた父を欺いた悲しみ、溺愛してくれた母の懐かしさが次々に思い起こされて込み上げてきます。ヤコブもこれまでの自分の悪事を思わずにはいられません。「自分は何とということをしてきたのだろう」。初めて、悔いのこころ

が起りました。これからどうなるのだろうか、将来に對する不安が襲ってきました。そして、今、まさに自分はひとりぼっちであることを思い知らされたのです。忸怩たる思いで、ひたすらさみしく心細く、石を枕にいつしか眠りにつきました。

二、神との出会い(12～17)

眠りに落ちたヤコブは、その夜、一つの夢を見ました。それは不思議な夢でした。一つの梯子が天から地にまでくだって立っていました。その上を神の御使いたちが上り下りしているのです。その光景の中から、ヤコブ自身に語りかける主の声が聞こえてきました。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。」その瞬間、ヤコブはこれまで伝え聞いていた祖父アブラハムを祝福した神、父イサクに現れた神を思い起こしました。その神が今、ヤコブにも現れてくださったのです。「ヤコブよ、お前は恐れ悲しみつつ、たつたひとりでの不安な旅を続けている。しかし、お前は一人ではない。わたしはお前と共にいる。お前がどこに行くにも、共にいてお前を守る。わたしは、決してお前を見捨てはしない」。思いがけない神からのことばは、慰めに満ちたことばで

した。この経験はヤコブにとって大きな転換点となりました。「わたしは知らなかった。そうだ、わたしは一人ではなかったのだ。こんなわびしい、一人ぼっちの愚かな自分に、主はその御目を注いでくださったのだ。こんな者と共にいてくださったのだ」。ヤコブの霊の目が開かれた瞬間でした。今まで恵まれた環境の中で育ち、自分を愛し守ってくれる人々の中で自由に思いのままに生きて来たヤコブでした。兄を出し抜いて長子の特権さえ手に入れたのです。しかし、今、追われるようにして故郷を後にして、一人、孤独な旅の中で初めて知ったのは自分の本当に醜い罪深い姿でした。しかし、このような自分に対して、神はみこころを留めてくださり、共にいてくださるといいます。「ヤコブの神との出会い」こそ、新しいヤコブの誕生の瞬間でした。

フランスの哲学者ブレイズ・パスカルは、多くの思想遍歴の後、ついに自分の神を見出したのです。その時、彼は「『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』、哲学者や、学者の神ではない。確かだ、確かだ、心のふれあい、よろこび、平和、イエス・キリストの神」と、歓喜の叫びをあげました（パンセツ737・4〜6、田辺保訳）。

三、ベテルの経験（18〜22）

人生は、人間の目から見ると、偶然や不思議に満ちています。ヤコブは故郷を追われ、孤独な旅の中で野宿するという状況で、「こんなところで、こんな自分のために、神が共におられる」という驚くべき恵みを見出したのです。「神が共におられる」ということ、これこそ、すべて悲しむ人、孤独な者、自分の弱さを知らされる人、罪を思い出して自責の念にかられ思い悩む人にとって、真の救いです。ヤコブは、今や「わたしの神」となってくださった主を恐れかしこみ、その体験の場所に石の枕を立てて油を注ぎ、天の門と呼び、ベテル（神の家）と名づけました。「神われらと共にいます」は、私たちの救いそのものです。そして、主イエスこそ、私たちのインマヌエル（マタイ1・23）です。様々な状況や出来事の中で罪深い自分を知らされ、そこでキリストの救いを知ることこそ、わたしのベテルの経験です。

結論

こんなところにと思われる場所に、共におられる神に目を上げていきましょう。

研究資料

(小平徳行)

ヤコブは父イサクを欺いて兄エサウの祝福を自らのものとした(27章)。そのため母リベカはエサウに命を狙われたヤコブを逃がすために、妻をめとるためという口実でハラシへと行かせた。ヤコブはその孤独な放浪の旅路において神に出会うのである。これは彼にとって最初の個人的な神との出会いの経験であった。

テキスト

10 ハラン ベエル・シエバからベテルを通り、ハラシまでの旅路は880キロ以上になる。

11 ある場所にたどり着き 「着く」(ハ)パーガ)は「遭遇する」「出会う」という意味で、偶然の意味合いの強い言葉。人間的には偶然と思えることも神の側からは必然である。

12 見よ ここに二回使われている。夢の中で見た幻は驚くべきものであった。一つのはしごが地に立てられていた 「はしご」(ハ)スラーム)は語源的には「積み上げる」(ハ)サーラル)から来ていることから、高速道路の

ランプのような傾斜した道か、階段のようなものともとれる。ここで重要なことは天と地を結ぶものであるという点。別訳には「地に向けて」とあり、地からではなく、天からのもの、つまり、人からの接近ではなく、神からの接近であることを強調する訳もある。神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた 御使いは救いを受け継ぐ人々に仕える者であるから(ヘブル1・14)、この光景は神がヤコブを保護されることの約束(15)の保証を暗示するものである(詩篇34・7参照)。また、このはしごは神と人とを結ぶ道であるキリストの予表でもある(ヨハネ1・51参照)。

13 「主」がその上に立って、こう言われた 主の臨在への気づきは、主の御声を聞くことから生まれる。ここでヤコブが契約の継承者であることが確認される。

14 15 ここには子孫の繁栄、子孫による地上のすべての部族の祝福についての約束がなされている。これはアブラハムやイサクにも約束されていた事である。それに加えて、主がヤコブとともにおられること、主は約束を成し遂げるまで決して捨てないことが示されている。実際に、その後ヤコブの歩んだ道のりは険しいものであり、

約束が成就するまで、主の臨在は不可欠であった。主がともにおられることが契約の根本であると言える。

16 まことに「主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。家を離れ、今まで親しんでいた礼拝の場所を離れ、非常に孤独を感じている時に、この予期しない所で主の臨在を知った驚きが表れている。利己的な罪深い自らをも顧みてくださり、ともにいると約束してくださった主の恵み深さへの驚きでもあろう。

17 神の家 神の臨在の場所。人生の旅路のどこにでも神と対面する「神の家」がある。天の門 神の臨在に触れることが許された場所を示す表現。

18 自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ 石そのものを神格化したのではなく、神がヤコブに現れ、アブラハム、イサクへの約束を引き継がせてくださったことを証しする記念碑として。油を注いだ 契約あるいは誓いが神聖であり、冒すことのできないものであることを表す象徴的な行為。

19 その場所の名を、ベテルと呼んだ アブラハムはベテルで二度祭壇を築き、礼拝している(12・8、13・3)。アブラハムの時代の記事に「ベテル」を用いているのは、

後に名づけられた地名で説明しているため。ヤコブは、ここがかつてアブラハムが祭壇を築いて礼拝した場所であることを知らなかったと考えられる。このような場所に導いて、同じように神の名を呼ばせることに神の摂理を見る。

21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、「主」は私の神となり ヤコブが22節の誓いを果たすための条件のような形で書かれている。しかしこれは、主がそのようにしてくださるかどうかわからないという疑いを含んだ言葉ではなく、神の約束に基づいての誓願と取るべきであろう。新改訳第二版は「私が無事に父の家に帰ることができ、「主」が私の神となってくくださるので」と、ヤコブが約束の実現を確信し、先取りしたように訳している。

22 十分の一 所有物の聖別である。ヤコブの場合は、律法によるものでなく、自由意志によるささげものである。アブラハムにならったのかもしれない(14・20)。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』(いのちのことは社)、G. J. Wenham (Word) 他

聖書

創世記50・15〜21

タイトル

すべてを良きに変える神

暗唱聖句

神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。創世記50・15〜21

目標

すべてのことを益としてくださる神を信じて生きる。

導入

(和田牧子)

みなさんはお家や学校で、うれしいこともあれば苦しいこと、泣いてしまったこともあると思います。何でこんないやなことがたくさんあるんだろうと思うこともあるかもしれません。教会学校の先生にお祈りをしてもらったり、相談できそうならしてみてください。それとともにどうか旧約聖書に出てくるヨセフさんのお話を思い出してくださいね。

ヨセフ売られる！

先週のお話に出てきたヤコブにはその後たくさんのお息子が与えられました。ヨセフはお父さんが年をとってから生まれた子どもなので特別に愛されています。ヨセフは17歳の時、お兄さんたちといっしょに羊飼いをし

いました。ヨセフはお兄さんたちの悪いところをお父さんに告げ口したり、お兄さんたちが怒るような夢の話をしてしまい、憎まれるようになりました。そしてとうとうお兄さんたちによって遠い国エジプトに売られてしまったのです。

家族と離ればなれになってしまったヨセフはその後どうなったでしょう？ 神さまがヨセフとともにおられたので、自分を買った主人のもとで一生涯働きました。ところがそのうちヨセフは無実の罪をきせられて長い間ろう屋に入れられてしまうのです。またもや最悪なことが起こってしまいました。

ところがろう屋にいたことがきっかけで、ヨセフはエジプトの王さまファラオが見たふしぎな夢をみごとにとさあかしました。「王さま、やがて大ききんが来ます！」ファラオはびっくりし、またヨセフのことを喜び、王さまの次に大切な仕事につけ全国を治めさせたのです。

兄たちとの再会

さて、ヨセフが言ったとおり、全国に7年のききんがやってきました。雨も降らず、土地はかわいて、食物がとれなくなりました。しかしエジプトにはヨセフの助言

でたくさんの食べ物が集められていました。カナンに住んでいたお父さんのヤコブは息子たちに言いました。「エジプトにはたくさんの食物があるらしいから買ってきなさい。」

ヨセフのお兄さんたちは食べ物を買うためにエジプトにやってきました。ヨセフはエジプトで食べ物を売る役人をしていました。目の前にやってきて自分の前にひれ伏す人たちを見てびっくり！「兄さんたちだ！」もちろんお兄さんたちはエジプトのえらい役人がヨセフだとは気づきもしません。エジプトにヨセフを売りとはしてから20年以上も経っていましたから。

ヨセフはお兄さんたちといくつかのやりとりをしたあと、とうとう大きな声をあげて泣き出してしまいました。「わたしはヨセフです。お父さんは元気ですか？」お兄さんたちは驚きのあまり声も出ません。「わたしを売ったことで自分たちを責めないでください！ 神さまはあなたगतより先にわたしをこの地につかわし、みんなのいのちを救うようにしてくださいました！」

♪歩こうイエスの道

その後、お父さんのヤコブや家族みんなもエジプトに

やってきました。「お父さん！」「おお、ヨセフ！」ヨセフはお父さんのヤコブをだきしめ、いっぱい泣きました。やがて年老いたヤコブは死んでしまいます。お兄さんたちは「お父さんが死んだ今、ヨセフはわたしたちを憎んで仕返しをするかもしれない」と心配しました。でもヨセフは「恐れなくてください。お兄さんたちはわたしに悪いことをたくらみしました。でも神さまはそれを良い計画へと変えて、多くの人々のいのちを救われたのです！」神さまの大きな愛ゆえにここまで守り導かれたことをヨセフは知っていました。そんなヨセフはお兄さんたちに仕返しする気持ちにはならなかったのですね。

結び

出口が見えないような苦しいことが続くかもしれせん。そのような時、どうか聖書の神さまを信じて、神さまから離れないで生きていってください。神さまは「最悪！」と思うことの中にも働いてくださり、それを一番良いふうに導いてくださる方です。つまずきたおれそうになっても神さまは必ず助けてくださいます！

♪歩こうイエスの道を♪ (イン81、PW15)

聖書 創世記50・15～21 テーマ すべてを良きに変える神

序論

(高橋頼男)

ヨセフの物語は創世記37～50章に記されています。彼の生涯は波乱万丈、逆転劇の連続ではらはらさせられます。それは様々な試練を通して生きて働かれる神による麗しい摂理の物語であり、ヨセフを通して神の救いの計画が成就していくという、救済史の偉大なドラマです。

カナン地方に激しい飢饉ききんが起こり、ヤコブは穀物の買い付けのために息子たちにエジプトに行くよう言いつけました。エジプトには、かつて兄弟たちが憎んで奴隷として売り渡した弟ヨセフが、20年を超える年月を経て、今や宰相となってエジプト全国を支配していました。

一、ヨセフと兄弟たちの再会(15～21)

ヨセフは、カナンからやってきておそるおそるエジプトの宰相(ヨセフ)の前にひれ伏し食料を求める十人のイスラエル人を見た時、それが自分たちの兄であることがわかりました。一方兄たちは、今をときめくエジプトの宰相が弟ヨセフであろうとは思いません。ヨセ

フはある考えをもって、わざと横柄な荒々しい態度で兄たちをあしらいました。しかし、長い年月を経て兄たちの顔を見、懐かしい故郷の言語を耳にして心が動かされます。二度目に彼らがエジプトを訪れた折、そこに弟ベニヤミンを認めると、なつかしさに心がせまり、これ以上こらえられなくなって急いで部屋に逃れ、声を上げて泣きました。そしてついにヨセフは、兄弟たちに自分の正体をうちあけるのです。同時に彼は、二十数年前に自分が兄弟たちの憎しみによって、エジプトに売られたことの背景に、主の深いご計画があったのだと悟りました。ヨセフは、同席していたエジプト人たちをみな退席させ、兄弟たちだけになったとき、声を上げて泣きながら、ヘブル語で「私はヨセフです。父上はお元気ですか」と語りかけました(45・2)。

驚いたのは兄たちです。返事をすることもできず、呆然と立ちつくしました。同時に非常な恐れを感じました。あんなにひどい目に合わせた弟ヨセフが本当にこのエジプトの大臣ならば、自分たちはどんなにひどい仕返しを受けるかわからないと思ったのです。しかし、半信半疑の兄弟たちに近づいたヨセフは言いました。「私は、あな

たがたがエジプトに売った弟のヨセフです。私をここに売ったことで、今、心を痛めたり自分を責めたりしないでください。神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださいました。：ですから、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです」。

二、ヨセフの信仰(19～20)

長い間、異教の地に生活し、しかも世の権力者になっていたヨセフ、生活様式も全くエジプト化し、エジプトの服装、言語、名も「ツアフエナテ・パネアハ」(41・45)と呼ばれるようになっていましたが、やはりヤコブの子でした。アブラハム以来の信仰の血と祝福の流れは彼の内生きていたのです。外面的にはどんなに異教化していても、彼は神の民イスラエルの心をしっかりと内に秘めていました。世俗の中に身を置きつつ、「主」がヨセフとともにおられた」(39・2、21、23)との恵みによって生き生きと神への信頼に生きてきた人の姿を見ます。そして、これは彼と共にいてくださった神の恵みです。ヨセフは、エジプトの総理大臣としてではなく、ヤコブの子の一人として、アブラハム、イサク、ヤコブの神を信じ告白する者として、そして、共にいてくださる神

の恵みをあらゆる困難な中で経験したひとりの証人として立っているのです。

三、摂理信仰に生きる幸い(22～26)

ヨセフの身内が来たというので、ファラオをはじめエジプトの人々は大歓迎しました。そしてついに老いた父ヤコブも、エジプトが備えた車に迎えられて、エジプトへと移住することになったのです(45・21～46・7)。ヨセフはヤコブの死を看取り、また自らも満ち足りた死を迎えます。このような経緯いきざつの中に偉大な神の計り知れない救いのご計画が着々とおし進められているとは、誰が想像することができたでしょうか。悲しみも苦しみも、誤解も恐れも、困窮も不安も、「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています」(ローマ8・28)とは、なんとという素晴らしい神の恵みでしょう。どんな時、どのような展開の中にも、主が共におられ、力強いご支配の中にすべてをみ心のまま、万事を益となるよう導いて下さいます。

結論

わたしたちは、この神を信じて生きるのです。

研究資料

(小平徳行)

この箇所はヨセフ物語の最後の場面の一つ。特に20節は、この物語の全体の鍵となることばである。また、ヨセフ物語を学ぶ上で、主がヨセフとともにおられたことと、ヨセフがキリストのひな型であることも覚えておきたい。

テキスト

15 父ヤコブの死によって兄たちは、ヨセフと自分たちとを結び付けていたものがなくなつたと感じ、彼らはヨセフの報復を恐れた。すべての悪に対して、仕返しをする。ここでは強調するために「報復する」(ヘシユープ)という語を2度続けており、「十分に、確かに、仕返しする」という意味が込められている。「すべての悪に」とあり、兄たちは、ヨセフの報復が徹底したものになるのではないかと恐れている。兄たちは、すでに自分たちの罪を悔いており、ヨセフも悟られないようにそれを聞き分けていたが(42・21〜23)、直接ヨセフに対して、悔い改めを言葉に表していなかつたために、ヨセフに赦ゆるされたという確信を持てなかつたのであろう。

16〜17 兄たちはヨセフのあわれみを得るためにあらゆる努力をした。彼らはヨセフに言い送つた。兄たちは用心深く、直接会う前に人を介して伝言した。あなたの父は死ぬ前に命じられました。父が死ぬ前の非常に厳粛な時の命令であることを強調している。これは兄たちの作り事であるという見方もある。なぜならこのような指示をしたことは明記されておらず、かつて兄たちがヨセフにどんな事をしたのかをヤコブは知らなかつた可能性があるからである。しかし、ヤコブはヨセフを信用していたにせよ、不安を示す兄弟たちのために、この発言をした可能性はある。おまえの兄弟たちは、実に、おまえに悪いことをしたが、兄弟たちの背きと罪を赦してやりなさい。旧約聖書では悪い行いに関して4つの主要な用語が使われているが、そのうちの3つがここに使われている。「悪」(ヘラー)、「背き」(ヘペシヤ。罪は神に背き、人に背くこと)によってその正体を表す、「罪」(ヘハツター、「的外れ」の意味で、目標を失い、道から外れること)。このことから兄たちは自らの罪を包括的に様々な角度から捉えて悔い改めていることが分かる。ちなみにもう一つは「咎」(ヘアーウォーン)で、これは「ゆがん

でいる」という言葉に由来し、心の思い、言葉、行動がゆがんでいることを意味する。これはユダの悔い改めの言葉（44・16）に使われている。ヨセフは彼らのことばを聞いて泣いた。その心は必ずしも明らかではないが、父ヤコブの言葉を聞いたことや兄たちの心情をあわれに思ったこと、そして兄弟の結び付きを新たに感じたゆえの涙であると思われる。また、こうして人を介して伝える必要はないほど、自分は兄たちから恐れられていることに対してでもあるであろう。ヨセフがこれまでに示してきた善意が、兄たちへの赦しの心から来ていることを理解されていない悲しみも含まれているのかもしれない。

18 兄弟たちも来て、彼の前にひれ伏して ヨセフのかつて見た夢（37章）が再び成就した（42・6、43・26、28）。

19 私が神の代わりになることができるでしょうか ここでヨセフは神こそが真のさばき主であって、自分にはその権威はないことを告白している。

20 あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました これはローマ8・28とともに摂理信仰の典型的なことばである。

内容的には45・4〜8で兄弟たちに話したことと同じ。兄たちは、ヨセフの見た夢の実現を阻止しようとして、ヨセフを売り渡した（37・28）。しかし、神はヨセフといつものともにおられて（39・2、3、21、23等）、それを良いことに変え、民の救いのために用いられたのである。そしてヨセフの見た夢を成就させた。人間の罪さえも、神はご自身の良い目的のために用い、すべてのことを最善に導かれたのである。まさに、人間が自らの罪深い意志によって、キリストを十字架につけたことが、神の永遠のご計画である救いの成就であったこと（使徒2・23）と同様である。この点でヨセフはキリストのひな型であった。この世の悪を超えて、神はすべてを支配され、ご自身のご計画を成し遂げられる。良いこと（ \wedge トープ）「善」の意味。「あなたはいつくしみ深く、良くしてくださるお方です」（詩篇119・68）などにも使われている。ローマ8・28の「益」も「善」の意味。神の摂理は、神の善なるご性質によるものであり、神のはかり知れない愛と知恵と力の結晶である。

参考図書 8月13日分と同じ。

聖書 マタイ9・1-8

タイトル 罪の赦しの恵み

暗唱聖句 子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪は

赦された。 マタイ9・2

目標 あらゆる祝福に先だって、罪の赦しの恵みを受け取る。

導入

(土屋開夫)

この夏休みも毎日暑かったです。熱中症やケガからは守られましたか？ もし病院に行かなければならぬくらい大変な時、誰かが連れて行ってくれると助かりますね。

私が関西聖書神学校にいた時、同級生の一人が急にひどいギックリ腰になってしまいました。身動きも出来ない程でしたので、同級生みんなで彼を折りたたみサイズのベッドに乗せ、そしてゆっくり車に乗せ、病院に運びました。その時、まるで今日の聖書のお話みたいだなあ、と思いました。今日のお話は、ある病気の人を周りの人たちがイエス様のところに連れて来たお話です。

主のもとに連れて行ってくれる仲間

この人は「中風」と言って、体が麻痺してしまう病気にかかっていた。人によって、言葉がしゃべれなくなったり、手や足が動かなくなったりします。この人も、寝たきりで動けない程に病気が重かったようです。

そんなある時、イエス様が町に来られました。イエス様にお会いできれば、きつと癒されるでしょう。でも、自分では会いに行くことが出来ません。けれども幸いなことに、彼にはイエス様の元に連れて行ってくれる家族や友達がいました。あなたも誰かをイエス様のもとに、そして教会に連れて行ってあげて下さいね。

全てを見通すイエス様の目

さてイエス様は、イエス様のもとに癒しを求めてきた彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪は赦された」と言われました。

彼らが求めていたのは、この人の体が癒される事です。けれどもイエス様はスゴイですね！ イエス様を人をご覧になる時、その人の表面だけを見るのではなく、その人の心の中や、過去・現在・未来、全てをご覧になるの

です。レントゲン写真よりスゴイですね。

そして、その人が求めているそのものではなく、それ以上のもの、その人に本当に必要なものを与えようと思えるのです！ イエス様がこの人をご覧になった時、体の癒しも必要でしたが、それ以上に「罪の赦し」が必要でした。全ての人にとって一番必要なこと、それは罪が赦されて神の子どもとされる事です！

罪を赦すイエス様の権威

するとそれを聞いていた律法学者たちが心の中で言いました、「この人は神を汚している」と。イエス様のことを神の御子だと信じていなかったのです。「罪を赦すことが出来るのは神だけなのに」と心で文句を言ったのです。その心の声が聞こえたイエス様はこう言われました「『あなたの罪はゆるされた』、と言うのと、『起きて歩け』、と言うのと、どちらが易しいか。』皆さんはどう思いますか？ 中風という体の病気を治すことは、もしかしたらスーパードクター（名医）でも出来るかも知れません。でもどんなに医学が進歩しても、人の魂の「死の病」である「罪」を取り除くことは、決して出来ません。それ

が出来るのは、本当の神様だけです。

イエス様は神の御子ですから、人の罪を赦す権威（力）があるのです。けれども、心の中の罪が赦された事は、目には見えません。そこでイエス様は「人の子（イエス様）が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたが知るために」と言って、この人の体の病気である中風も癒されたのです。こうすればイエス様の神の御子としての権威（力）が誰にもよく分かります。

まとめ

体の病気も人を苦しめますが、最も人を苦しめ、永遠の死に至らせる恐ろしい病気は「罪」という魂の病気です。ただ一人、神の御子イエス様だけがこの罪を赦し、私たちが神の子どもにして下さる事が出来るのです！

あなたはもう罪を赦してもらいましたか？ あなたの家族や兄弟やお友達はどうでしょう？ 本当の超スーパードクターであるイエス様のもとに皆で行きましょう！

♪両手いっぱいのお愛♪

（ホ146、イン41、PW13、新聖歌483）

聖書 マタイ9・1〜8 テーマ 罪の赦しの恵み

序論

(福井文彦)

この個所の出来事は、「中風の人のいやし」と呼ばれています。しかし、ここで真に問題にされていることは、イエスが単に病をいやすことができるだけでなく、罪を赦す権威を持つておられることです。並行記事のマルコ2・1〜12、ルカ5・17〜26をも合わせ見ながら進めていきます。

一、罪の赦しの宣言

イエスは、カペナウムのある家で教えておられました。そこには大勢の人々が集まり、家の入り口までいっぱいになっていました。そこへ一人の中風の者が、四人に運ばれてやって来ました。ところが、戸口までも大勢の人で、イエスに近づくことができなかつたのです。

そこで、家の外側から屋上に上がる階段をのぼり、屋根をはいで大きな穴をあけました。家の中にいた人々に天井から突然ばらばらと土が落ちてきました。すると、中風の者が床のまま吊り降ろされてきたのです。そこに

は、中風の者が横たわっていて、屋根からのぞいている人たちは哀願するようにイエスを見ました。

するとイエスは〈彼らの信仰を見て〉、いきなり〈子よ、しっかりといなさい。あなたの罪は赦された〉と宣言されたのです。〈彼らの信仰〉とありますから、中風の者を運んで来た四人の人たちの信仰も含まれています。しかし、肝心なのは中風の者の信仰です。何よりも彼の信仰を見て、イエスは罪の赦しを宣言されたのです。

二、「冒瀆」という批判

ところがイエスが罪の赦しの宣言をされると律法学者たちは、心の中でこうつぶやきました。〈この人は神を冒瀆している〉と。というのは、律法学者たちは罪を赦すことができるのは神だけであると考えていたからです。彼らはイエスが神であることを認めていませんでした。ですから、神以外の者が罪を赦すなどとは、とんでもない罪だと思つたのです。

当時のユダヤ社会では、病氣はすべて罪の結果であると信じられていました。そこで病氣にかかるのは、他の人よりも罪深いからだと考えていたのです。これは、全く聖書的ではなく(ヨハネ9・1〜3参照)、イエスは、

こうした因果応報的な考えを受け入れておられませんでした。

それにしても、どうしてイエスはここで罪の赦しを宣言したのでしょうか。他の病人たちにしたように、ただちに手を差し伸べて彼を立ち上がらせることをどうしてしないのだろうか、人々は思ったことでしょう。

しかし、この個所で最も大切なことは、罪こそが人類にとつての根本問題であり、その解決のためイエスが来られたということなのです。

三、どちらがたやすいか

そこでイエスは「あなたの罪は赦された」と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか」と質問されました。私たち人間の間では、罪が本当に赦されたかどうか、その結果はだれにも見えません。すなわち確かめようがないので、口からの出まかせであっても言うことができます。しかし、中風のいやしは、起きて歩くことによつてすぐにわかります。ですから、「起きよ」とは安易に命じることができないのです。私たち人間にとつてはこちらのほうが難しいのです。

しかし実は、病気をいやすよりも罪を赦すことのほう

が、はるかに難しいのです。というのは、罪の赦しは、ただ神のみによつて与えられることだからです。そして律法学者はそのことを知っていました。そこでイエスは彼らにとつて難しいと思われていた中風のいやしをなさつたのです。

そこでイエスは、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために」と言つて、ただちに中風の者を立ち上がせました。立ち上がった彼は、床を自らたたんで家に帰って行きました。律法学者は、イエスの罪を赦す権威に対して言い逆らうことができませんでした。この奇跡によつて、イエスだけが罪を赦す権威を持つておられる唯一のお方であることが示されたのです。

結論

イエスだけが罪を赦す権威を持つておられます。そして中風の者だけでなく、だれもが罪の赦しを必要としています。イエスを信じ近づくと、中風の者のように罪が赦され、起き上がり、喜び勇んで歩む新しい人生が始まるのです。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

ここでの中心主題は、罪の赦しの権威についてである。病を癒すことができるイエスは、すべての病や苦難の根である罪を滅ぼし去ることがおできになる(病と罪の關係については後述を参照)。罪を滅ぼし、罪の赦しを人に与えることこそがイエスの本当の使命であり、それは十字架上で達成されるものであった。十字架なくして罪の赦しはなく、罪の赦しなくして本当の癒しもない。イエスは罪を赦す権威を持つ者として、神の国の到来を宣言し、本当の救いへと人を招かれたのである。

テキスト

2 人々が中風の人を床に寝かせたまま、みもとに運んで来た マルコやルカでは、四人の者がこの病人を運んできたこと、そして群衆のためにイエスに近寄ることができなかつたので、屋根から床ごとつりおろしたことが記されているが(マルコ2章、ルカ5章)、マタイはそれらの記述を省いて、罪の赦しに焦点を絞っている。彼らの信仰 イエスの癒しの力を信じて、なんとしてみも

とに行こうとした彼らの信仰。運んできた者たちだけでなく、病者本人も含まれるであろう。マタイは、詳細を省きつつも、マルコやルカが記したその行動を念頭に置いていたと考えて良いだろう。子よ [ギ]テクノン は「わたしの子よ」という親しみを込めた呼びかけで、そこにはイエスの愛とあわれみが込められている。あなたの罪は赦された 当時のユダヤ社会では、病は罪の結果であるという考えが蔓延まはしていたが(ヨハネ9・2参照)、因果応報の考えは全く聖書的でない(もちろん不品行や不摂生の結果として病気になるといった因果関係は当然あり得る)。義人が病で苦しむこともあるし、逆に悪人が健康で長生きすることもよくあることである。それでは病と罪は何の關係もないかと言うと、そうではない。むしろ、すべての病と苦難の起源は、死そのものと同様に、罪がこの世に入ったときにさかのぼると言える。その意味に限れば、すべての病や苦難は罪の結果なのである。この個所の中心点は、罪こそが人類にとつての最も根本的な問題だということ、そしてその解決のためにこそイエスは来られたのだと言うことである。イエスは、十字架と復活を通して、罪の一症状に過ぎない病や苦難

にだけではなく、その根本である罪そのものに対して決定的・致命的な一撃を加えたのである。

3 神を冒流している 律法学者たちは罪を赦すことができるのは神だけと考えていた。流神罪は基本的には神の名の乱用に適用されたが、その延長として、神になりすますことや、神にしかできないことをしようとすることも冒流と見なされた。彼らはそれまでの数々の出来事からイエスの神的權威に気付くべきであったが、形式主義に陥っていた彼らの靈的感性は鈍っていたのである。

4 なぜ心の中で悪いことを考えているのか 神の名と主権を守ろうというのは建前であって、律法学者たちの動機は、ご自身に対して抱いているねたみなどの悪意であることをイエスは見抜いていた。

5 どちらが易しいか 人間的な視点から見ると、結果が即座にあらわれ、効果がなければそれがすぐに露呈する病の癒しよりも、いかようにも言い逃れのできる罪の赦しの宣言の方が易しく思える。しかし本当の意味で難しいのは、言うまでもなく罪の赦しである。

6〜7 人の子が地上で罪を赦す權威を持っていることを、あなたがたが知るために ここにこのみわざの目的

がはっきりと示される。人の子（ダニエル7・13〜14参照）であるイエスが罪を赦し權威を持つていることを人々に知らせることである。目に見えない罪の赦しがそこでなされたことの証拠として、目に見える癒しのわざが行われたのである。**地上で** は「終末の到来に先がけて」の意。イエスによって神の国は既にもたらされ、信じる者はその前味を享受することができる。人の子として来られ、終末の祝福をこの世界にもたらし始めたイエスは、その使命のために、罪の赦しの權威を持つておられるのである。その權威によってイエスは、起きて寝床を担ぎ、家に帰りなさいと命じた。すると彼は起き上がり、家に帰った。この反応は、イエスの命令に即座に、そして正確に応答するものであった。

8 恐ろしくなり 畏怖の念は神的な顕現に対してなされる反応（17・6、28・5）。このような**權威を人にお与えになった神をあがめた** 群衆は、イエスの神性を認めるには至らないが、彼に与えられた神的權威を認め、それを与えた神をあがめたのである。

参考図書 注解書 D. H. Hagner (Word), D. Hill (NCB), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ14・13〜21

タイトル

5つのパンと2匹の魚

暗唱聖句

そして余ったパン切れを集めると、十二
のかごがいっぱいになった。

マタイ14・20

目標

所有する物、また自分自身を、神に献げ
る。

導入

(今田雅子)

9月になったね。夏休みも終わって学校も始まっているけど、まだまだ暑いよね。暑かったら、冷たいアイスクリームや飲み物って、美味しいよね。

皆さんが、自分の大好きな飲み物を持っていて、喉がカラカラになって飲もうとした時、目の前に暑くて倒れそうな人が何人かいて、何か飲んだら元気になりそうならどうする？ 持っている飲み物はちよつとしかない、何人も飲むには全然足りない！ どこかに飲み物をもらいに行こうって考えますか？

今日は、イエス様によって、たくさんの人たちが、少しの食べ物でお腹いっぱいになったお話です。

小さなもの、少しのものでも

ある時、たくさんの人たちがイエス様の後についてきました。男の人だけでも五千人、女の人と子どもを入れたら一万人以上いたかも知れません。皆さんの学校の一クラスの人数は何人ぐらいかな？ 30人？ それより多かったです、少なかったですと思うけど、一年生から六年生まで全員が集まっても千人より少ないと思います。だから、男の人が五千人ってすごい人数です！

イエス様についてきた人たちは、夕方になっても、イエス様の所から誰も離れて行こうとしません。そんな時、弟子たちが「イエス様、ここは何もない所ですし、時間ももう遅くなったので、みんなを解散させて、それぞれで村に食べ物を買に行かせてください」と言いました。するとイエス様は「彼らは行かなくてよい。あなたがたがみんなに食べ物をあげなさい」と言われました。「えっ！ イエス様、何てことを。私たちがこんなたくさんの人たちに食べ物をあげる？ それを買うお金なんて！」弟子たちがどうしたら良いかを考えていた時、一人の子どもが自分の持っていた5つのパンと2匹の魚を持ってきたのです(ヨハネ6・9参照)。自分は食べるの

を我慢して、イエス様のお役に立ててもらおうと思ったのです。

でも、こんなたくさんの人なのに、これっぽっちじゃ全然足りない！

皆さんもそんなふうに考えることってないですか？
「ぼくは小さいから何もできない」「世界中にはお腹が空いて倒れそうな人がいっぱいいるけど、私のお小遣いで少しだから何の役にも立たない」って。

弟子たちもそう思ったことでしょう。「こんなちよつとじゃ…」でもイエス様は「それを、ここに持つて来なさい」と言われました。どんな物もどんな人も、そこにあるだけ、そこにいるだけだったら役に立つことはないでしょう。でも、何でも出来るすつこい神の御子イエス様にせゝんぶ持つて行く時、喜んで献げる時、どんな物も、どんな人も、役に立つようにイエス様がしてくださいのです！

5つのパンと2匹の魚を手にとったイエス様は、天を見上げ神をほめたたえ、パンを裂いて弟子たちにお与えになりました。すると、不思議なことが起こったのです。5つのパンと2匹の魚は、イエス様によって何千倍にも

増やされ、弟子たちはそれを受け取って皆に配りました。配っても配ってもなくならず、そこにいた人たちはみんな、お腹いっぱいになるまで食べました。それだけではなく、「余ったパン切れを集めると、十二のかごがいっぱいになった」のです。子どもが持っていたたった5つのパンと2匹の魚、イエス様の所に持つて行くとすつこい奇跡が起こったのです。

イエス様に用いていただく

私たちには色んなものが与えられています。体のぜんぶを使って色んな事をイエス様に献げることができません。教会の人たちと一緒に教会の集会案内を配ったり、誰かの所にお花を持つて行ったりする。それも、イエス様のお役に立つ事でしょう。

私たちがイエス様に用いて使ってもらえるなんて、イエス様のお役に立てるなんて一番良いこと、素晴らしいことです。

私たちの心と体を喜んでイエス様に献げましょう！
イエス様はとっても喜んでくださいます！

♪主は僕らを用いてくださる♪ (PW59)

聖書 マタイ14・13〜21
テーマ 5つのパンと2匹の魚

序論

(高橋頼男)

「パンの奇跡」については四福音書がこぞって取り上げています。この奇跡は、イエスのお働きの生涯における頂点を示すものでした。パンの奇跡、すなわち五千人の給食物語は、すべての人に感動的で、だれにも無条件に喜びをもたらした出来事です。へ人々はみな、食べて満腹した」とありますが、やはり食べて満ち足りることの経験は記憶の中にいつまでも残るものなのでしょう。

この奇跡の起りは、五千人を超える飢えた群衆を前にして、小さな取るに足らないもの、パン五つと魚二匹が主の前に持ってこられ、さざげられたことでした。

一、あなたがたの手で(16)

弟子たちは、これほど多くの飢えた人々の食事を準備することは、自分たちの手にはとても負えないと判断しました。そこで、群衆を解散させ、彼ら自身がそれぞれ食べ物を求めることを提案しました。この弟子たちの判断と提案は、この状況においてきわめて常識的なもので

した。いわゆる群衆の「自己責任」に委ねたのです。しかし、イエスのお考えは違っていました。イエスは「彼らが行く必要はありません。あなたがたがあの人たちに食べる物をあげなさい」と言われたのです。そこで、彼らが持っているものを探すと、パン五つと、干し魚が二匹ありました。しかも、これは少年がもっていたお弁当だといえます。彼らはこれらを数えて「それが何になるでしょう」(ヨハネ6・9)と言いました。ここにはパン五つと魚が二匹よりほかなく、自分たちの持てる物は、全く無に等しいことを認めざるを得ません。疲れ、飢えた大群衆の前に、弟子たちは何と小さく無力であったことでしょう。

二、それを、パンに持って来なさい(18)

弟子たちが途方に暮れていると、主は「それを、ここに持って来なさい」と言われました。自分たちの持っているものを、いきなり人に与えるのではなく、まず、それを主のもとに持って行くこと、主におさげすること、を命じられました。主はその小さな貧しいものを受け取られ、御手に取って祝福されました。そして、主が祝福されたものを再び弟子たちの手に委ねられたのです。弟

子たちはそれを群衆に配りました。そのとき、人々は食べて満腹し、満足し、残りのパンくずを集めると十二のかごに一杯になりました。

私たちのささげものがどのようにして主に用いられるのか、その過程を大切にしましょう。なぜなら、私たちの小ささ、無力さに、主の祝福とその全能が臨む時、私たちは主にあって大きな働きを担うことができるのです。

ひとりの少女が言いました。「小さなわたしだけでは、何も出来ません。しかし、わたしの手の中にある六ペンスと、そこに神の御手が加えられるなら、どんなことでも出来るのです！」

パウロも言います。「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです」(ピリピ4・13)。

三、祝福されるささげもの

小さなもの、とるに足らないものであっても、主に小さささげするとき、主はそれを手に取って、きよめ、祝福し、お働きのため、人々のために用いてくださいます。しかし、この小さなささげもの、「五つのパンと二匹の魚」は、どんなに小さくあっても、少年の持っているすべて

であり、弟子たちが集めた全部であったのです。

主が「だれよりも多くを投げ入れました」と言われた、やもめの手に握られたレプタ二つは、宮にささげることが許された最少額でした。しかし、やもめの2レプタは、彼女の生活費のすべてだったので(ルカ21・1〜4)。

主が祝福されるささげものは、適当なもの、余裕を残したものの、まして、余りものなどであるはずがありません。主が喜んで受け入れられるささげものは、小さくても、貧しくても、私の全てであり、私のベストであるはずです。わたしたちのささげもの、奉仕に対して、主は「それが、あなたのベストですか？」とやさしく問いかけられます。「あなたは…恥じるのではない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい」(IIテモテ2・15)。

結論

わたしたちは、自分が主の働き人としてまことに小さく、卑しく、弱いものであることを知らされます。しかし、そのようなものを喜んで受け取り、きよめ、祝福して、御手の中で豊かに用いて下さる主を信頼し、私のベストをおささげしていきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

四つの福音書に共通して登場する奇跡は、受難と復活の記事を除いてはこのパンの奇跡だけである（並行記事は、マルコ6・30～44、ルカ9・10～17、ヨハネ6・1～14）。言うまでもないことであるが、受難と復活の記事はイエスの出来事のクライマックスである。では、なぜこの記事がすべての福音書に描かれているのだろうか。それはまず、この奇跡が弟子たちにとって非常に大きな出来事であったということである。それまでは個人的な癒しの奇跡であったものが、このような大群衆を前にしての、しかも大群衆のための奇跡へと発展してきたのである。そして次には、この奇跡の持つ霊的な意味の重要性の故である。ヨハネによる福音書では、この奇跡の後に「わたしが命のパンである」（ヨハネ6・35）と語られた。このパンの奇跡は、古来より様々な解釈がなされている（詳細は省略）が、「いのちのパン」であるイエスによって文字通りに行われたものである。

テキスト

13 それ この個所の直前に描かれているバプテスマの

ヨハネの殺害に関する記事のこと。バプテスマのヨハネの死は、イエスにとっては衝撃的な出来事であったであろう。注解者の中には、このヨハネの死をイエスの死の伏線ととらえる者もいる。舟で イエスが向かった先は、ガリラヤ湖の向こう岸（参照ヨハネ6・1）であり、その目的は寂しい所へ行かれるためであった。

14 あわれんで マルコの並行記事では、この言葉の前に「羊飼いのいない羊の群れのようにであった」（マルコ6・34）とあり、イエスがこの群衆をどのようにご覧になっているかをよく示す言葉として注目される（マタイ9・36）。

15 夕方になった 夕食どきになってしまった、という意味が込められている。ここは人里離れたところで、群衆を解散させてください この言葉は、弟子たちの現状認識としては極めて常識的な判断だったであろう。しかし、ある注解者は、弟子たちがカナの婚礼の奇跡（ヨハネ2・1～11）の出来事を心にとめていたならば、このような言葉を出すことはなく、イエスに期待したであろうと述べている。そうでなくても、弟子たちがこの直前にイエスの手を通してなされたいやしのわざを

覚えていたなら、やはりこのような言葉は出なかったであろうと考えられる。いずれにしても、常識にとらわれていた弟子たちには、目の前の主のわざが見えなくなっていたのであろう。

16 **あなたがたが** 前節の弟子たちの言葉に対して、イエスには他の考えがあった。それは、弟子たちがこの群集を養うことであった。口語訳聖書や聖書協会共同訳には「あなたがたの手で」とあるとおりである。

17 **ここには五つのパンと二匹の魚しかありません** この弟子たちの言葉は、やはり前節のように現実しか見えない弟子たちの言葉である。「しか」という言葉にそれがよく表れている。わたしたちは持つていないのである。しかしこの言葉は同時に、次節の弟子たちの行為によってイエスの御業を引き出すという意味で、なくてはならないものだったともいえる。**五つのパンと二匹の魚** ヨハネの並行記事を見ると、おそらくこれは少年のお弁当だったのではないかと推測できる(ヨハネ6・9)。このパンと魚は、当時の人々のごく普通の食物といわれており、特にパン(ヨハネ6・9では「大麦のパン」)は当時の貧しい人々の食物であった。

18 **それを、ここに持って来なさい** たとえ「五つのパンと二匹の魚でしかない」と思ったとしても、主はそれを用いて御業をなされる。主は、いかなる献げものであったとしても、神の国の御業のためには弟子たちが持つてきたものを喜んでお用いになるのである。

19 マルコの並行記事にみられる詳細(マルコ6・37(38))はここでは省略され、かわって弟子たちが直接手渡した姿が強調されている。弟子たちにとっては、イエスの素晴らしい御業に直接関与できる、これ以上ない素晴らしい機会であったであろう。

20 **十二のかご** 十二弟子を指す数字であるとも、イスラエルの十二部族を指す数字であるとも考えられる。

21 **女と子どもを除いて** 当時のユダヤ社会では、納税と徴兵の義務を負っていた成人男性のみを人数として数えていた。マタイはそのような会衆に対して福音書を書いたので、このような表現となっている。女性と子どもを加えた実際の人数は、一万人とも二万人とも言われる。

参考図書 8月6日分に同じ

聖書 マタイ14・22〜33

タイトル 嵐を鎮めたイエス

暗唱聖句 しつかりしなさい。わたしだ。恐れるこ

とはない。 マタイ14・27

目標 人生の逆風の中でもキリストを見上げ、

信仰を持つて前進する。

導入

(今田雅子)

皆さんが毎日生活する中で「え、何で、どうしてこんなことが！」って、突然起こる色んな出来事があるよね。思いがけない怪我をしたり、事故に巻き込まれたりして。今日はイエス様の弟子たちが突然起こった出来事に悩まされるお話です。

嵐の湖

先週、イエス様はたった5つのパンと2匹の魚で五千人以上の人たちのお腹をいっぱいにされました。すつこいイエス様の奇跡でした。「俺たちは、こんな素晴らしいイエス様の弟子なんだぞ！ すごいだろ！」と自慢したい気分、喜びいっぱいでした。ところが、イエス様はそんな弟子たちを舟に乗り込ませ、湖の向こう岸に先

に行くように命令されたのです。そして、イエス様はそこにいたたくさんの人たちを解散させ、祈るために一人で山に登られました。夕方になってそこで祈り続けておられました。弟子たちを乗せた舟は陸から何百メートルも離れ湖のまん中あたり、向こう岸に行こうとするのですが、前から風が吹いてきて漕いでも漕いでも進まないのです。弟子たちは、一晚中波に悩まされ、疲れてクタクタになりながら、すつこく揺れる舟につかまって「舟が沈んだらどうしよう」とガタガタ震えていました。

弟子たちを励ますイエス様

夜明けが近づいて、いちばん暗くなる時、イエス様は湖の上を歩いて弟子たちの所に行かれました。彼らは、暗い湖の上を誰かが歩いている姿を見て「ギャーあれは何だ！ 幽霊だー」とすつこく怖がり恐ろしくて叫んだのです。ガタガタ震える弟子たちに、イエス様はすぐに「しつかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と話しかけられたのです。するとペテロが「イエス様、私に命じて、水の上を歩いてあなたのところに行かせてください」と言うと「来なさい」と言われたので、ペテロが舟から一歩出て、水の上に足を踏み出したとき、

なつなつなんとペテロは水の上を歩いていたので。イエス様の言葉を聞いて信じて頼って疑わなかったのが水の上を歩くことができたのですね。ところが、風の音を聞いてちよつと風に吹かれた波を見たとき、恐ろしさで心が一杯になって怖くなり、ブクブクと沈みかけたのです。そこで彼は「主よ、助けてください」と大声で叫びました。そんなペテロに、イエス様はすぐに手を伸ばして彼を助け「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われたのです。そして、ペテロとイエス様が舟に乗り込むと、すぐに風はやんだのです。

どんなときでもイエス様を見つづける

舟の中でこのことを見ていた弟子たちは「まことに、あなたは神の子です」とイエス様を礼拝したのです。

イエス様は、どうして弟子たちを舟に乗せ、湖に送り出されたのでしょうか？ それは、弟子たちを訓練する為でした。5つのパンと2匹の魚で、五千人以上の人がちがお腹いっぱいになるという、すつゝごいイエス様の奇跡を見た弟子たちでした。けれども、イエス様が神様で、何でも出来る、イエス様に出来ないことは一つもないということが、まだわからなかったのです。このよう

な弟子たちを訓練する為、湖に送り出され、ご自分は一人で祈っていてくださったのです。弟子たちは「舟が沈んで死ぬかもしれない」という恐ろしさの中で「自分は何もできない」ということに気がついて、イエス様を心の底から信じる人に変えられたのです。

皆さん、一生懸命頑張ってもよくならない。どうしたらいいかわからない。何をしても上手くいかなくて困ったり悩んだり、心配や不安で心がいっぱいになる。そんなときってあるよね。そんなとき「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない」と言ってくださるイエス様。それも、皆さん一人ひとりにです。そして、どんなときでも見守っていてくださるイエス様。このイエス様を信じ、見上げて頼りましょう。また、どんな事でも「イエス様、助けてください」と祈るとき、イエス様はそのときにピッタリでちょうど良い助けを与えてくださるお方なのです。色んな大変なことが起こったとき、苦しいとき、悲しいときにこそ、イエス様を見上げ、イエス様の言われる言葉を思い出し、信じ頼って歩きましょう。

♪明日に向かいチャレンジ♪(PW58、イン76)

聖書 マタイ14・22～33 テーマ 嵐を鎮めたイエス

序論

(高橋頼男)

パンの奇跡に喜び興奮した群衆がご自分を王にしようと熱狂しているのを知られたとき、主イエスは、群衆と弟子たちを分け、弟子たちを強いて船に乗せて向こう岸へと出発させ、また、群衆を解散させられました。そして、ご自分は、一人で折るために山に登られたのです。

一、逆風に漕ぎ悩み、恐れる弟子たち (24～27)

主イエスに強いられて船に乗り込み、向こう岸を目指して出発した弟子たちでしたが、沖で向かい風に悩まされ、思うように進むことができません。夜通し漕ぎ、疲れて、夜中の三時頃になって暗闇が最も増すとき、イエスが水の上を歩いて来られるのを見ました。弟子たちは「幽霊だ!」と言って、叫び声を上げました。

ここには、逆風を恐れ、暗闇を恐れ、さらに、湖を歩いて近づかれる主イエスを幽霊と見間違えて恐れる弟子たちの姿があります。彼らは信仰ではなく、恐れに満ちています。私たちの信仰生活の中でも、厳しい現状に捨

て置かれたような思いになって不安と恐れに捕えられ、不信仰に支配されてしまうことがあります。主イエスに従って船に乗り込み、漕ぎ出したはずなのですが、暗闇の中で漕ぎ悩んでしまいます。しかも、船の中に主はおられず、逆風がいよいよ吹き荒れ前進できません。逆風とは真正面から吹いてくる風です。これからどうなっていくのか全くわからない不安と焦り、恐れに捕らわれてしまうのです。しかし、私たちが主イエスとそのみ言葉に従っているのなら、暗闇も逆風も決して恐れることはないのです。なぜなら、主イエスはどんな状況の時にも私たちのことを見ておられ、執り成していただくからです。そして、闇が最も濃くなる時、私たちの思いもよらない方法で、私たちを助けるために近づいてくださり、船に乗り込んできて、すべてを支配し静めてくださるのです。主は弟子たちを強いて船に乗り込ませられ、湖の中で試みに会わせられました。これは主の訓練であつたと思われます。同様に、主はわたしたちをも、沖に漕ぎ出させ、暗闇と向かい風のただ中で、主に信頼することを教えられるのです。

二、おぼれたペテロ (28～30)

湖の上を歩いて近づいてこられるのがイエスであることを認めたペテロは、おそばに行きたいと大胆な願いを口走りました。〈主よ。あなたでしたら、私に命じて、水の上を歩いてあなたのところに行かせてください〉。すると、主はペテロの求めに対して〈来なさい〉と言われました。ペテロが船から一歩、水の上に踏み出したとき、なんとペテロは水の上を歩いていたのです。主のお言葉を聞き、お言葉に信頼して一歩を踏み出すとき、まさしく信仰による世界が開かれるのです。ところが、ペテロが風の音を聞いてふと波を垣間見た瞬間、たちまち恐れが彼の心に入りました。そして、その恐れはたちまち彼の心と意思を支配したのです。その結果、ペテロは信仰を失って、ぶくぶくと沈んでしまったのです。彼は大声で〈主よ、助けてください〉と叫びました。そんなペテロに主はすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて〈信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか〉と言われました。

私たちも、主ご自身から目を離して波風の音に反応して現実を見るなら、たちどころに主のおことばへの信頼を損ない、信仰の世界から離れ、自分をとりまく現実のみが大きくなってしまいます。

三、逆風の中で主イエスを見る（ヘブル12・2）

ペテロはなぜ沈んでしまったのでしょうか。彼は主イエスのみ顔を見、〈来なさい〉と言われたお言葉を聞いて一歩踏み出した時、湖の上を歩きました。しかし、風の音を聞き主イエスから目を離して、他のものに目を向けた瞬間、恐れが彼の心と意思を支配して主に対する信頼を失わせてしまったのです。それは、彼が「水を踏む信仰とその歩み」を失った瞬間でした。

思いがけない困難が襲ったとき、苦しみや悲しみが押し寄せるときにこそ、イエスを仰ぎましょう。「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい」（ヘブル12・2）。私たちがいつも心がけるべきことは、イエスから目を離さないこと、どんな場合、どんな状況からでも真つ直ぐにイエスを仰ぎ見ることです。「わたしは絶えず主に相対しています」（詩編16・8、新共同訳）。

結論

主イエスから目を離さないでいましょう。いつでもどこからでも、何度でも、主イエスを仰ぎましょう。そして、生きた信仰の歩みを導いていただきますように。

研究資料

(宮澤清志)

テキストト

22 それからすぐに 前節までのいわゆる「五千人の給食」の奇跡の後。並行記事のマルコもヨハネも、この二つの記事はセットで登場しており、この二つの物語を相補的に理解しなければならぬことになる。舟に乗り込ませて 口語訳も聖書協会共同訳も、この言葉の前に「強いて」という言葉を入れて、弟子たちが船に乗り込んだのはイエスの強い意志がそこにあることを暗示している。

23 祈るために一人で山に登られた 福音書においては、イエスの宣教活動における重要な出来事の前や後には、(山に登って)祈るということがしばしば言及される。

24 何スタディオン 1スタディオンは約200m。マルコによれば、この時舟は「湖の真ん中」(マルコ6・47)にあった。向かい風 ガリラヤ湖特有の突風。

25 夜明けが近づいたころ 口語訳聖書では「夜明けの四時ごろ」、また新改訳第3版では「夜中の三時ごろ」となっている。直訳では「第四の夜回り」となる。当時の

ローマ人は、午後6時から午前6時までの間を四等分して時間帯として用いていた。つまり第4の区分である午前3時から6時までの間を指す。弟子たちのところに来られた イエスは弟子たちを見捨てられることは決してない。山での祈りを終えられると、イエスは弟子たちの方へと歩みを進められるのである。あるいはイエスは困難に直面した弟子たちを助けるのに最も良い時を知っておられたのであろう。

26 幽霊 この言葉は当時のユダヤ人たちは至極一般的なものであった。この言葉はいかなる幻影にも用いられていた。おびえ、恐ろしさのあまり叫んだ 「おびえ」「恐ろしさ」「叫んだ」といった同種の言葉が繰り返されており、弟子たちの驚きがどれほど大きかったかをよく表している。なお、イエスの現れに対して弟子たちがイエスを見分けることができなかつたのは、エマオでの顕現(ルカ24・13)、ティベリア湖での顕現(ヨハネ21・4)においても見られる。

27 わたしだ(ギ)エゴ・エイミ 直訳は「わたしこそ」。神の自己啓示の言葉であって、ご自身を旧約聖書のヤールウエと同一視された言葉である(出エジプト3・

- 14、イザヤ43・10)。このイエスこそ生ける神であって、風と波との支配者であるとの宣言の言葉である。恐れることはない。直訳は「恐れることをやめなさい」となる。
- 28 この個所から後の言葉は、並行記事であるマルコやヨハネにはない。マタイ独特の個所である。主よ。あなたでしたら 訳だけを見ると、疑問形のように見える。しかし、この呼びかけは、前節の「わたしである」に対応しての「あなたなのですから」(直訳)という全能の神、自然の支配者への呼びかけの意図が込められていると考えられる。
- 29 来なさい イエスの答えはこの一言のみである。しかし、主の弟子にとつてはこの一言だけで充分であった。
- 30 強風を見て それまでのペテロは、ただイエスのみを見ていたということの裏返しとしての言葉。主よ、助けてください 天の御国の民にとつては最も大切な言葉である。
- 31 信仰の薄い者よ イエスはここで「信仰がない」とはおっしゃらなかつた。「信仰が薄い」のであって、「信仰が少ない」「信仰が足りない」という意味である。信仰とは、主と主の言葉に信頼することであり、ここではイ

エスの「来なさい」という言葉のみを頼りにして、主から目をそらさずに歩むことであつた。信じつつも信じきれない弱い弟子の姿がここに表れている。疑った ギリシャ語の原意は「二つに分かれる」である。一方では信じつつも、他方では嵐に氣をとられて心が二つに分かれてしまうことである。

33 マルコにはこの弟子たちの告白は省略されている。弟子たちは同様の経験をすでに8・23〜27においてしていた。しかし、五千人の給食の奇跡とこの出来事によって、彼らの告白はイエスを「神の子」として礼拝するまでに至つた。まさにこの個所の中心は、イエスが誰であるかということを示しているのである。

参考図書 9月3日分と同じ

聖書

出エジプト2・1～10

タイトル

モーセの誕生

暗唱聖句

信仰によって、モーセは生まれてから三

か月の間、両親によって隠されていました。

へブル11・23

目標

危機の中で、信仰によって神の助けを求めらる。

導入

(土屋開夫)

この中で9月生まれの人はいますか？ おめでとうございます！ まあ何月に生まれたとしても、人間が生まれるという事はおめでたい事ですね。

全ての人にとって確かなことが三つあります。

- ① 全ての人には、神様によって命を与えられた、という事。
- ② 全ての人には、神様によって愛されている、という事。
- ③ 全ての人には、神様によって役目を与えられている、という事。だから一人一人は、とっても大切です！

奴隷にされていた神の民

ところで、前にヨセフさんのお話を聞いたのを覚えて

いますか？ ヨセフさんにも神様から与えられた大事な役割がありました。ヨセフさんはイスラエルの12人兄弟の11番目の弟でしたが、神様の不思議な計画でエジプトに売り飛ばされ、その後、なんとエジプトで一番偉い大臣になりました。ヨセフさんはお父さんと兄弟をエジプトに呼び寄せ、そのお陰で家族みんな飢饉から守られました。そして、たくさんの子孫が増えました。

さあ、それから長い年月が過ぎ、イスラエルの子孫たちはいつの間にか、エジプトで奴隷として働かせられるようになっていました。

以前のエジプトの王様は親切で、イスラエルの家族をお客様として扱ってくれました。でも、この時の王様は悪い王様で、イスラエルの一族を苦しめ、もう人数がこれ以上増えないようにと、なんと、男の子の赤ちゃんが生れたら殺してしまえつ、と命令したのです！

モーセの誕生と両親の信仰

そんな恐ろしい時代の中で、かの有名なモーセさんが生れました！ さあ、でも大変です。だってイスラエルの一族に男の赤ちゃんが生れたら殺されてしまうのです！

お父さんとお母さんはどうしたでしょう？ 今日の日暗唱聖句を見てください。

「信仰によって、モーセは生まれてから三か月の間、両親によって隠されていました。」(ヘブル11・23)

お父さんお母さんは、勿論、可愛い赤ちゃんを殺すことなんて出来ません。それだけでなく、最初に言った通り、「この子は、①神様が命を与え、②神様に愛されている子だ。③そして、きつと大事な役目があるに違いない」と「信仰によって」思ったことでしょう！

だから、その子を守るために三か月のあいだ隠して育てたのです。でも、いつまでも隠すことは出来ません。そこで、なんと赤ちゃんをかこの中に入れ(水が漏れないようにして)、川岸の草の中にそっと置いたのです！

お父さんお母さんにしてみれば、すごく勇気のいる行動だったと思います。心配でたまらなかつた事でしょう。けれども、全ての子どもは神様の子どもです。お父さんお母さんは精一杯、子どもを守り育てますが、最後の部分は、神様に全くお任せするしかないのです。「主よ、この子はあなたの子どもです。あなたがこの子を守り、その命も、人生も導いて下さい！」と。

結果、この赤ちゃんはエジプトの王様の娘に拾われ、成長し、やがてイスラエルの一族をエジプトから救い出すという、神様からの大事な役目を果たすのです。

あなたにも

さあ、今度はあなたの話です。神様から大切な役目を与えられているのは、モーセさんやヨセフさんだけではありません。あなたにも神様から与えられる大切な役目があるのです！

勿論それは、モーセさんのように何百万人もの人をエジプトから脱出させるような、そんな大仕事ではないかも知れません。もしかしたら一匹の羊を救い出すような役目かも知れません。

そして今はまだ、それが何か分からないかも知れませんが、モーセさんだつて80歳でやっと分かつたのです。

今からお祈りしておきましょう。「天のお父様、私をとつても愛して、生れさせて下さった事を感謝します。この私も、神様のために用いてください。アーメン。」

♪明日に向かいチャレンジ♪(PW58、イン76)

聖書 出エジプト2・1～10 テーマ モーセの誕生

序論

(宮澤清志)

やがてイスラエルの民をエジプトから導き出す指導者として用いられるモーセですが、その誕生の時から人知を超えた神の救いの手が働いていました。また、危機の中で信仰を働かせた人たちがいました。

一、危機の中でただ主に委ねる

創世記の最後に、エジプトに移り住んだヤコブの子孫は大いに増えました。これを恐れた新しい王は、ヘブルびとを奴隷として苦しめましたが、それでもヘブルびとは増え、非常に強くなりました。そこで、王は生まれてくるヘブルびとの男の子はナイル川に投げ込むように命じました。その状況の中でモーセは生まれました。

両親は生まれた男の子を救う決心をし、「信仰によって」(ヘブル11・23)三カ月の間、隠していましたが、成長するにつれて隠しきれなくなりました。

男の子はファラオの命令に従ってナイル川に連れてこ

られました。ただ、両親は子どもを主の手に委ね、パピルスで編んだかごに入れて、葦の茂みに置きました。

〈かご〉と訳されている言葉は、ノアの洪水の「箱舟」と同じ言葉です。動力も舵もたず、ただ流れに任せるままの乗り物です。しかし、ノアもモーセの両親も信仰をもって、最善をなされる主の手にすべてを委ねました。またノアが鳩を放つて確かめたように、ここでは、モーセの姉がこの男の子がどうなるのかを見守っていました。

二、危機の中に備えられた救いの道

そこに王女(ファラオの娘)が身を洗うために、川に降りてきました。そしてかごと、その中の子どもを見つけました。顔つきで分かったのか、身を包んでいた布の柄やデザインで気づいたのか、王女はその男の子がヘブルびとの子であることに気づきました。

王女もファラオの命令は知っており、〈かわいそうに〉思ったところに、モーセの姉が近寄って〈あなた様にヘブル人の中から乳母を一人呼んで参りましょうか〉と声をかけました。

まだ王女は、その子をどうするか決めていませんでしたが、もうすでにその赤ちゃんの責任を王女が持つていくのかのような声掛けに、王女は決心してその言葉に従いました。

王女が川に降りてきたタイムシングと、そのあわれみ的心を主は備えておられました。また、見守っていた姉に、恐れないで王女に声をかけ最善の言葉を口にする知恵を与えられたのも主です。両親から始まって、危機の中でも危機を恐れず主を畏れる人が、祈り決心して行動する時、主はまことの神を知らない者をも思わぬ協力者として用い、救いの道を備えてくださいます。

三、危機を祝福に変えられる主

ファラオの命令は、エジプト中のすべての民に向けられていましたが、王女は従う必要がありませんでした。結果、男の子はモーセと名付けられて、宮中での教育と訓練を受けることができ、やがてイスラエルの民を率いるのに役立てることができました。

また、幼少時に母のもとで育てられたことにより、主を畏れる信仰の土台が据えられました。ナイル川に流さ

れて終わるはずだった赤ん坊の生涯は、主の不思議な手によって、信仰の基礎と最高の教育を与えられることになりました。

私たちも時に危機的な経験をすることがあります。しかし、イエス様を信じ救われたこと自体が、最大の危機から主の恵みによって救われた経験だったのです。スポーツなどで、「失うものは何もない」と挑戦していく言葉を聞きます。私たちも恵みによって救われ、生かされた者であることをおぼえて、危機の中で主に委ね、また知恵と勇気を与えられて、大胆に主の道に歩むことができるのです。

結論

モーセを水の中から引き出された主は、私たちも罪と滅びの中からすでに救い出してくださいました。なお危機を感じるがあつても、その中で神の守りと助けを経験する者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

へブル人に生れた男の子をナイル川に投げ込めとのファラオの布告は将来的にはイスラエルの全滅を意味する。これに抵抗する手段は人間的には無いように思われた。まさにイスラエルは危機を迎えたのであるが、その中で信仰によって歩んだ両親がいた。イスラエルの指導者モーセは、この信仰の中で生かされ、育てられたのである。

テキスト

1 レビの家のある人 出エジプト6・20によれば、これはアムラムであり、レビ人の娘 とはヨケベデである。

2 その子がかわいいのを見て ステパノはモーセについて「神の目になつた、かわいい子で」(使徒7・20)と表現している。両親は信仰によって、この麗しさは神がこの男の子に特別のご計画を持っておられるしるしであると感じた。生きた信仰を持っている時、非常に小さな手がかりから神の顧みを信じ、勇気を得ることができ。隠しておいた この行為は、単に親としての情か

らなされたものではなく、神がこの子を顧みてくださるという信仰、さらには、神はご自身の民を必ず守られるという約束に対する信仰による行為であった(へブル11・23)。彼らは「王の命令を恐れなかった」(同)のである。たとえ危険が伴っても、信仰は行動という結果となつて表われる。

3 それ以上隠しきれなくなり 3か月になった健康な赤ん坊の泣き声は大きいため、これ以上隠すことは不可能になつた。ヨケベデは「ナイル川に投げこめ」というファラオの命令の通りにしたが、できる限り生き延びることのできる手段を取つた。パピルス 茎高約2メートルで葉は毛髪のように頂上に固まって生じる。この茎を編んで、防水のために瀝青(れきせい、アスファルト)を塗つて舟を造つた。かご(へ)テーパー) 創世記6・9章の「箱舟」と同じ言葉。ナイル川の岸の葦の茂みの中に置いたおそらく浅瀬であり、かごが流されることがなく、また何も無い岸辺よりはワニなどに襲われる危険が少ない場所であった。

4 その子の姉 ミリアム(民数記26・59)。事の成り行きを見守っていたのは母親でなく姉であった。この時母

親は、自分の子を完全に神にゆだねていたのであろう。
 5 水浴びをしよう 古代エジプトでは、神聖なナイル川で水浴びをすることは、身を清めるだけでなく、寿命を長くすると信じられていた。

6 かわいいように思い ファラオの娘が王の命令にもかかわらず、ヘブル人の子にあわれみの情を抱いたのは女性特有のこまやかな愛情、本能的ともいえる母性愛のゆえである。しかし何より、神の御力が暴君の近くにいる人々の心に、善意と柔和な愛を置いたのである。古代エジプトの王女は非常に権勢があつて、王の命令にもかかわらず、ヘブル人の男子を王子のように養育することができた。彼女は無意識のうちに神の救いの御計画に参与することになった。

7〜9 モーセの姉は、ファラオの娘がこの男の子にあわれみの情を抱いたことを知ると、神からの知恵と勇氣を持つて、間髪を入れずに乳母を呼んでくることを申し出た。私が賃金を払いましょう 母親は自分の子どもを十分な賃金をもって育てることになった。しかもエジプト王家の庇護のもとにあつて、迫害のさなかにも安全に育てることができるようになったのである。後年、モー

セはエジプト王家の一員としての扱いを受けながらも、ヘブル人としての民族感情に燃え、ついにエジプトを向こうに回して戦うようになった。それは、幼い頃ヘブル人である母親ヨケベデに育てられた事が、大きく影響していたと考えられる。この個所には「神」という言葉は出て来ないが、エジプトにおけるイスラエルを深く顧みられる神の御手が背後にあることを強く感じさせる。

10 モーセ (へ)モーシエ ここではモーセの名の由来について、ファラオの娘が水の中から「引き出した」(へマシヤ)という語呂合わせから説明されているが、そのモーセは自分の民をエジプトから「引き出した」者でもあつた。この名についてはエジプト語を考慮して、「生む」とか「子」を意味する「メス」に由来するという見方もある。

参考図書 西満「出エジプト記」『新聖書注解・旧約I』、安田吉三郎「出エジプト記」『実用聖書注解』(以上、いのちのことば社)、レオ・G・コックス「出エジプト記」『ウエスレアン聖書注解・旧約篇I』(イムマヌエル綜合伝道団) 他。

聖書

ヨシユア6・1〜20 b

タイトル

主の勝利

暗唱聖句

そうすれば町の城壁は崩れ落ちる。民はそれぞれ、まっすぐに攻め上れ。

ヨシユア6・5

目標

人間的な方法でなく、神の方法によって勝利を得る。

導入

(飯田勝彦)

先週は、モーセのことを学びました。今日は、ヨシユアです。ヨシユアはモーセの後、イスラエルのリーダーとなった人です。もし、皆さんがヨシユアだったらどんな気持ちでしょうか。「僕で大丈夫かなあ。みんなは僕のことを聞いてくれるかなあ」と心配になりませんか？ヨシユアも同じ気持ちだったでしょう。でも彼はりっぱにリーダーとしての役目を果たすことができました。

困難という城壁

モーセの後を継いだヨシユアにとって最初の仕事は、ヨルダン川を越えてカナンの地に民を導き入れることです。不思議なようにヨルダン川がせき止められ、民は皆、

ヨルダン川を渡ることができました。ヨシユアはホッとしたことでしょう。しかし、そこにはエリコの町がありました。エリコの町には勇士(2)と記されるほどの、勇ましい者たちがいたのです。

エリコはイスラエルの民の力では勝ち目のない大きな相手でした。せつかく約束の地に入ったにも拘わらず、エリコの城壁が困難という大きな壁となつて立ちほだかつたのです。

みんなも、「どうしよう。困ったなあ。大丈夫かなあ。」と困難な壁が目の前に立ちほだかるときがあるでしょう。それは決して特別なことではありません。イエス様は「世にあつては苦難があります」(ヨハネ16・33)と言われました。生きている限り悩みや苦難が無くなることはありません。悩みや苦難に遭つたときにどうするかが大切です。

勝利の約束

強いエリコを目の前にして立ち尽くしていたとき、主がヨシユアに現れて声をかけられました(5・15)。主の言葉を確認しましょう。6・2を見てください。

【主】はヨシユアに告げられた。『見よ、わたしはエリ

コとその王、勇士たちをあなたの手に渡した。』。

これを見て何か不思議に思うことがないですか？ ヨシユアはまだエリコと戦っていません。でも、主はすでにヨシユアがエリコに勝利することを約束しておられるのです。これはヨシユアが強いからではありません。このエリコの戦いは、主の戦いであり主が勝利して下さることを約束されているのです。私たちが信頼する主は、いつも私たちより先に、恵みを備えていく下さるお方です。

主はただ勝利の約束をされただけではありません。エリコの町に対してどのように戦ったらよいのかを具体的に教えて下さいました。それは、ヨシユアと民で協力してエリコの城壁に上り町に侵入し必死に敵と戦え、というものではありませんでした。一日に一回契約の箱と共に角笛を吹きながらエリコの町を一周します。それを六日続けます。そして、七日目には町を七周して角笛を吹き鳴らし、同時に大声で叫びなさい。そうすると、城壁は崩れエリコの町に入っていき攻撃することができるといふものではないかと。

これが主の勝利のための作戦だったのです。

信頼して前進

主の勝利の約束は感謝ですが、その作戦を聞くと「本当に勝利できるのかなあ」と思いませんか？ リーダーであるヨシユアはどうしたでしょうか。彼は、主の命令に従って主の言われる通り祭司や民に伝えました。ヨシユアが主の命令を聞いたとしても、他の者たちも従わなければ意味がありません。この戦いは、みんなの協力が必要でした。幸いに祭司や民たちも主の命令に従って行動したのです。その結果、主の約束どおりイスラエルはエリコに勝利することができました。なぜ、彼らは従うことができたのでしょうか。それは、エジプトからここまで導いてくださった主に信頼していたからです。

まとめ

ヨシユアやイスラエルの民に勝利を与えられた主は、今、私たちが信じている同じ主です。主は、私たちのことをよく知っていて下さいます。そして、すでに勝利を与えてくださっています。主に信頼して歩みましょう。主は必ず困難を乗り越える力を与えて下さるのですから。

♪ 恐れなない♪ (プレイズ&ワーシップ146)

聖書 ヨシユア6・1〜20b テーマ ヨシユアとエリコの町

序論

(高橋頼男)

ヨルダンを渡りカナンに進入したヨシユアとイスラエルの民の前に、エリコが立ち塞がっていました。カナンに侵入して約束の地を獲得していくためには、どうしてもまずエリコを攻略することが肝要でした。エリコは、古代からのオアシス都市であり、難攻不落の城壁を誇る町でした。出エジプト以来40年、荒野を彷徨^{さまよ}ってきた難民集団が、どうしてまともにエリコと戦い、攻略することができのでしょうか。改めてエリコを眼前に仰ぎ見たヨシユアは、どう戦ったらよいのか途方にくれました。しかし、この戦いは人間の戦いではなく、神が戦われる戦いです。したがって、人間の方法で勝利するのではなく、神の方法で勝利するのです。エリコは、神ご自身と神の方法による勝利によって初めて勝ち取られるのです。

一、主を軍勢の将として迎える(5・13〜15)

エリコ攻略のために思案していたヨシユアの前に、いきなり抜き身の剣をもった一人の人が立ちました。ヨ

シユアは思わず「あなたは私たちの味方ですか、それとも敵ですか」と問いかけました。その人は「いや、わたしは【主】の軍の将として、今、来たのだ」と言いました。ヨシユアはそのお方の前で地にひれ伏して礼拝し、足のくつを脱ぎました。そのお方こそイスラエルの主であるお方でした。そこで主はヨシユアに驚くべきエリコの攻略方法をお示しになったのです。

主を軍勢の将としてお迎えし、ひれ伏して礼拝すること、み前に足から靴を脱ぎ、戦いの主権をこのお方に完全に明け渡すことが神の方法による勝利の第一歩です。

二、主の言葉を信じる(6・1〜2c)

主は、これから私はあなたに味方して、奇跡を起こし、強大な町とエリコの王と大勇士を打ち負かそう、そして、町をあなたと民に与えようと言われたのではありません。わたしは、すでに「あなたの手にわたした」と、戦いが勝利をもって完了したかのごとく宣言されたのです。何のしるしも兆候もなく、説明もその過程も語られず、ただそれだけのことを言われたのです。ヨシユアは「アーメン」と信じて受け入れました。それが信仰です。信仰とは、告げられたみ言葉を信じることで、し

かしその信仰はたしかに「望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるもの」(ヘブル11・1)です。神の信仰は私たちへの説得や納得ではありません。人間の合意や可能性でもありません。それは、ただ神の言葉を信じていることです。しかし、そこに神の方法による勝利の第二步があります。

三、主の言葉に従う(6・3〜20)

さらに、神の言葉を信じていることはお言葉ですからお従いしますと、そのごとく信じ従っていくこと(ルカ5・5)。しかし、主のお言葉に従うことは、ほんとうに難しいことでした。

主のご命令は、六日間エリコの町を一日に一回、回らなければならぬ。七人の祭司がラッパを吹き鳴らし、主の箱をかく者はそのあとに従わねばならない。七日目には七回、回らねばならない。そして、民が大声で呼ばわるとき、エリコの町の石垣は崩れ落ちる。その時、民は町に乗り込み、その町を占領することができる…というものでした。果たして、ただこれだけのことでこの巨大なエリコの町が崩れるのだろうか。まことに信じがたいことです。何もせず、ただ町の周りを沈黙してひたす

ら歩くというのです。愚かで、たわごとのように思えてくる神の言葉です。沈黙の中にただひたすら歩きながら、「こんなことで大丈夫なのか、こんなことをしていいのだろうか」と、ヨシユアや民にふと疑念が湧いてきたかもしれません。しかし、とにもかくにも、ヨシユアと民は、この主の命令に従って、大真面目で主のお言葉を実行したのです。この戦いは「それは、戦闘態勢ではなく、宗教行事の行列だった。戦争自体が礼拝行為になっているのはエリコの戦い以外には見られない」(鍋谷堯爾)と指摘されるほどの異例の戦いでした。信じ従うということは、主のお言葉が分からなくても、まるで愚かのように思えても、ただ神のお言葉に信頼し、ひたすら聴き、そして従うことです。これこそ神の勝利の最終歩でした。その結果、ヨシユアと民は、驚くべき圧倒的な神の勝利を経験したのです。

結論

今日も、難しい問題や課題を抱えている私たちですが、主に明け渡し、み言葉にひたすら聴き、お言葉に徹底して従うことこそ、神の方法による勝利の道と心得ましよう。ここに人知を超えた神の力あるご支配があるのです。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 エリコ ヨルダン川西岸、死海の北約10キロメートルあまりの場所にあった町。オリエント世界最古の要塞都市の一つとされている。イスラエルの子らの前にエリコの住民は、イスラエル軍の侵攻の前に震えおのんでいた(2・9、11、5・1等参照)。

2 5節まで、主がヨシユアに対して出されたエリコ陥落のための具体的な指示が語られる。本節はその指示の要約である。主 5・13〜15に登場する、主の軍勢の將と考えられる。見よ、わたしは：渡した エリコに対する勝利は神の賜物であり、この勝利が神の意志によって既にすでに達成されたものであることをあらわしている。特に、渡した という言葉は完了形であり、そのことを端的に物語っている。実際の占領は、神の側の既成の事実がこの地上において展開され、遂行されるにすぎないのである(天的既決定の地的追決定)。

4 七人 七つの 七日目 七回 「七」は、古代イスラエルでは聖なる数であり、また「完全数」であるとも

言われている。特に、宗教的祭儀には七という数字は重要である(レビ4・6、8・11、16・14等)。雄羊の角笛通常、戦争(Ⅱ歴代13・13以下)と礼拝式(民数記10・1〜10、詩篇47・5)において用いられた。

これまでの節からもわかることは、エリコの城壁の崩落の出来事は、イスラエルの民の軍事的行為ではなく、宗教的行為であるということである。同時にこの行進は、信仰者の信仰の歩みの行進であるとも見ることができさる。

8〜11 主の指示(2〜5)に従って下されたヨシユアの命令(6〜7)は、その民によって遂行された。この個所の詳細は、すでに前の個所によって確認されている。ここで再びその詳細を記す。

まず、武装した者たち(4・13、6・7、9) が存在していたことから、これらの一連の行進は宗教的行為であると同時にやはり軍事的な行進という要素も加わっている。それは、主の軍勢の將(5・15)の存在からも明らかである。しかし、本日の聖書個所全体の文脈から見れば、やはり第一義的にはこれら一連の行動は宗教的行為である。なお、この武装した者たち(ハルーツ)

は、戦闘の備えができている者、という意味を持ち、スポーツにおける前衛といった意味合いの言葉である。

次に、**雄羊の角笛**（4、8、他）は、聖書では民に戦いに対する備えをするようにとの準備や、聖なる行進のために用いられている（民数記10・9他）。しかしここではこのような意味以外にも、主の臨在を示し、また主の解放を示す意味合いもあった。

そして、**町の周りを回り**（4、7、11、他）という言葉は詩篇48・12にも用いられており、シオン（エルサレム）を巡る巡礼者の巡礼の姿を示している。

しかし、この個所がその前後の個所と決定的に異なる点は、**あなたがたはときの声をあげてはならない** というくだりである。イスラエルの民は、この戦いが主の戦いであることを徹底的に知る必要があった。主の戦いに人間のときの声は不要である。

12〜14 基本的には前節までの一日目の行動と同じ。

15〜16 主がヨシユアに命じられた7日目の指令（4〜5）が実行される時が来た。

17〜19 **聖絶せよ**（滅ぼす、滅ぼし尽くす） 旧約聖書、特に申命記とヨシユア記では重要な思想のひとつであ

る。イスラエルでは、戦争は宗教的行為である。それゆえ敵は〔へ〕ヘーレム、主にささげられるべきものとして滅ぼし尽くさなければならぬものとされていた。7章に登場するアカンは、この滅ぼし尽くすべきものを惜しんで横領し、一族もろとも滅ぼし尽くされた。戦争が聖なる戦争であるため、戦争に加わる者も聖なる者とされた。カナンの町々を攻略する者は、そこに住む人々を聖絶しなければならぬ（申命記20・16〜17）。なぜならば、彼らの偶像礼拝は不浄であり、それを除くことによって、主の聖さは保たれるからである。この点がおろそかにされるとイスラエルの民は偶像礼拝に惑わされ、主の怒りを招くことになる。イスラエルが聖なる民であり続けるためには、異教の偶像礼拝から切り離されていなければならぬのである。そうでなければ、アカンのように、自らが滅ぼされるべき者とされることになるのである（18）。ただし、金、銀、青銅、鉄およびそれらで造った器は、聖別されたものであって、主の宮に携え入れなければならぬ（19）。

参考図書 リチャード・S・ヘス『ティンデル聖書注解 ヨシユア記』（いのちのことば社） 他

牧羊ひろば



郡山キリスト共同教会 教会学校

●はじめに

「わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている―主のことば―。それはわざわざいではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」
(エレミヤ29・11)

郡山キリスト共同教会は、今年創立78周年を迎えます。

設立当初より、クリスチャンホームの形成が祈られ、子どもたちの救いを祈りつつ働きがなされてきた歴史があります。現在のCS教師の多くは、その中で育てられた方々です。同時に、教会の周りや信徒宅の近所

の方々にも福音宣教がなされてきました。教会学校の働きは宣教の最前線として、いまでも祈りと働きが継続されています。コロナの影響により、この3年間は様々な試行錯誤の連続でした。それでも子どもたちへの救霊の祈

りと働きは、変わらず続けられてきました。郡山の教会学校の働きの様子を、コロナ前・コロナ禍中・これから・という視点で紹介いたします。

●コロナ前

教会学校には、幼稚科から中高校まで10〜20名の子どもたちと9名ほどの先生方が出席し毎週礼拝をささげていました。4月の進級式に始まり、キャンプやサマースクール、クリスマス、餅つきなど毎月のように楽しい行



教会駐車場でサマーキャンプ・プール遊び 2017年

事もおこなわれ、子どもたちの要望で、アイススケートに出かけたこともあったようです。年度末には、教会のお昼の愛餐会時に、進級卒業のお祝いをして、子どもたちの抱負を聞いたりして、ひとりひとりの祝福を教会みんなで祈りました。対外的にも、小学校などにチラシを配って、子どもお楽しみ会などを開催し、子どもたちとおうちの方々にも喜ばれていました。これらの活動時には、教会学校の教師だけではなく、婦人会、壮年会、青年会の方々が手伝ってくださいました。また、シオンの丘で持たれる教区のバイブルキャンプに参加し、信仰の決心にみちびかれる魂もありました。

毎週の教会学校に加えて「パンとスूपの会」「パンだクラブ」「ほっとステーション」の集まりが始まり、卓球や囲碁など教会に遊びに来る小中高生たちもおり、それぞれに担当してくださる兄妹が与えられていました。「パンとスूपの会」は、三歳前後のお子さんとお母さんのために、教会で楽しく過ごしながらゆったりくつろげるひと時を過ごすしてもらいたいとの願いから二〇一六年に始まった働きです。毎月第4金曜日の10時半からお昼ごろまで、手遊びや絵本の読み聞かせこどもさんびかを

歌い、シヨートメッセージとおいしい軽食をいただいで心も身体も癒されるひと時として開かれていました。

参加者の名簿には、7組24名の母子のお名前がありました。二

〇一九年には学齢が上がり小学校に入るご家庭のために、毎月第2土曜日の10時から12時「パンだクラブ」がはじまりました。ホットケーキや白玉団子など、子どもたちも一緒に料理をしておたのしみが増えていきました。



パンとスूपの会1

●コロナ禍中

二〇二〇年4月、国内のコロナ感染者数が大幅な増加となり、教会の集会は礼拝の配信のみとなりました。一方の配信を受けるのみなので、互いの交わりは持つことができず、教会学校も開けませんでした。また配信、受信とも慣れておらず、困惑と格闘の日々であったことを思い出します。そんな中でも、教会学校の生徒はクリスチャンホームの子どもたちでしたので、家族と家庭で礼拝できたことは幸いでした。次々に来るコロナの波の中、6月より配信と共に対面での礼拝が再開され、大人も子どもともに集まって礼拝をささげる恵みを感じたことです。9月にはCS教師会が持てるようになり、10月より月1回第二主日の10時から10時15分に全クラス合同で教会学校が再開されました。たった15分ともいえるかもしれませんが、とてもうれしく感動したことが忘れられません。それから回数は月2回から3回、時間も9時45分からとなりました。3回のうち1回は、お楽しみ会として数独や卓球、プレゼント付きクイズ、お誕生会などを行っています。お誕生会は、教会学校が開けない時も、短く集まって、こどもさんびか80番「うまれる

まえから」を歌いプレゼントとお祈りのひと時を持っていました。教会学校の先生方も、以前のように毎週教会学校が開かれるようにと祈りながら、手紙やメールを書いたり、訪問をしたり、礼拝で会うと積極的に声掛けをして最近の様子を聞いたり子どもたちの魂に心を配り続けています。「パンとスूपの会」と「パンダクラブ」は休会が続いていますが、小学校に入学する子どもたちにお祝いの品を、子ども祝福式の時にはお菓子を届けていました。そうこうしているうちに、教会学校に集まる子どもたちは、クリスチャンホームの子どものみとなり、

日	時	7月26日(土)	日	時	7月27日(日)
				6:30	おはよう(起床・洗面)
				7:00	おいのりタイム
9:00		登 村	7:45		朝 食
9:30		ようこそ タイム	8:30		さちんヒタイム
9:45		みことほ ^{ミコトホ} タイム	9:15		みことほタイム(9:40)
10:30		ぶんきゅうタイム ^(10:20)	9:45		ぶんきゅうタイム(10:10)
11:30		登 食	10:15		またねタイム
12:30		出 祭			～ふれあいタイム～
1:00		ふれあいタイム			行先…ムシテック ワールド
3:00					
3:30		おふろタイム			
4:45		さんびタイム			
5:30		夕 食			
7:00		みことほタイム(7:30)			
7:35		ぶんきゅうタイム(8:10)			
8:15		花火タイム(8:45)			
9:30		おやすみ タイム			

2014年たのしいサマーキャンププログラム

成長は早く、多くの子どもたちが進学・就職などで、郡山を離れることもありました。祝福と祈り心でおくりだしますが、OB、OGとして帰省の折には顔を見せて一緒に教会学校に出席してくれるのはうれしいです。卒業後も郡山で就職し、教会学校に続いて出席し助けてくれる人もあり感謝です。

●変わらないういふ、これからのういふ

コロナ禍であろうとなかろうと、変わらないことがありました。CS教師の兄姉の熱い思いと教会の祈りと家



パンとスープの会2

族の協力です。子どもたちは教会から徒歩圏内に住んでいないので、車での送迎が必要なのです。教師は、家庭や祈祷会や毎月の教師会などでの祈りと働きかけを続けています。

子ども聖書日課も毎月印刷し小冊子にして、第一主日に今月の教会学校の案内の紙をはさんで配り、教会学校のメッセージの時に読み合わせたり各人が毎日読むように勧めています。表紙は子どもたちが描いたイラストが用いられたりします。日課は、教会の希望される兄姉にもお渡しして用いられています。子どもも祝福式



三代そろった子ども祝福式 2020年11月

も、小学校卒業するまでの子どもたちに、教会の礼拝で牧師より神さまの祝福と守りのお祈りをしていたいています。教会学校の生徒ばかりでなく、教会員のお孫さんやそのご家族の方も出席され、恵みのひとときとなっています。

この3月末には、進級卒業のお祝いのお会を開きました。皆でたこ焼き・ホットケーキなど作って食べ、ゲームなどしながらお祝いする会で、久しぶりに大人も子どもたちも楽しいひと時を過ごしました。ひとりひとりの子どもたちに注がれる神さまの思いを、ま



子ども聖書日課

される恵みに期待し、子どもたちも私たちも神様と共に歩む祝福の生涯を送れるよう、今できることで一歩一歩進んでいきたいと願われています。

(長尾明美)



進級卒業の祝(お祈りと新改訳2017聖書プレゼント)
2021年3月

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<https://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇二三年度Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は長崎めぐみ教会の後藤健一師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇六年度Ⅳ巻に掲載された工藤弘雄師の原稿を一部編集して再掲させていただきます。「牧羊ひろば」では郡山キリスト共同教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

メッセージ例	土屋開夫師	後藤真師	飯田勝彦師
聖書講解	和田牧子師	今田雅子師	宮澤清志師
研究資料	小泉創師	石田高保師	宮橋頼男師
	大頭真一師	石井文彦師	高橋清志師
	金井由嗣師	辻林和一師	宮澤清志師
	小平徳行師	中島啓一師	
ワーク(A)	宇野真佑美師	鎌野幸師	吉田美穂師
	三輪直子師	石川剛士師	山下大喜師
	竹崎光則師	野勢かほる師	
	上森恭子師	田中裕明師	八幡直人師
(C)	三輪正見師	後藤健一師	石田高保師
中高科へのヒント	田中愛子師	金田ゆり師	石田淳子師
子ども聖書日課	柴田福音師	後藤栄子師	丹羽遥姉
フラッシュカード	松浦あん姉		
み言葉カード・イラスト	柴田福音師	後藤栄子師	丹羽遥姉
ワープロ打ち込み	松浦あん姉		
校	中島啓一師	中島啓一師	
	後藤健一師		

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、組版の松木共栄印刷、印刷のプリントパックに心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 **牧羊者**
二〇二三年度 Ⅱ巻

発行所 日本イエス・キリスト教団
企画監修 日本イエス・キリスト教団・信徒局 教会教育室
印刷所 株式会社プリントバック

二〇二三年七月一日発行
日本イエス・キリスト教団・信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三―三―一九
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-1661

* 聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会許諾番号41217510号